

都城市内遺跡 10

- *The Sites excavated in Miyakonojō City (10th)* -

2017

都城市教育委員会

序

本書は、都城市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。各種開発に対し、埋蔵文化財の保護を目的に行った試掘・確認調査、自然崩壊によって発見された地下式横穴墓の発掘調査の記録を報告しています。

この報告書が文化財行政の一資料としてだけでなく、学校教育・生涯学習の場などで広く活用され、地域の歴史を知る手掛かりとして活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、多大なる御協力を賜りました各関係機関、地域の皆様に対し深く感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

都城市教育委員会
教育長 黒木哲徳

例言

1. 本書は、都城市が平成 28 年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金及び宮崎県埋蔵文化財緊急調査補助金を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 補助事業の事業主体は都城市、調査主体は都城市教育委員会である。
3. 調査の目的は、都城市内の各種開発予定地における埋蔵文化財の有無及び遺存状況の確認である。
4. 本書では、平成 28 年度に実施した試掘・確認調査等のうち、補助事業として実施した 10 件、平成 11 年度に実施した地下式横穴墓緊急調査 1 件の概要を報告している。
5. 現場における記録写真の撮影及びトレンチ配置図・土層断面図の作成、製図、調査概要の作成は、各調査担当者が行った。
6. 古人骨の分析は松下孝幸氏・松下真実氏、親族構造分析は舟橋京子氏（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）に依頼した。
7. 出土遺物の実測は、文化財嘱託川俣唱子及び整理事業員が行い、製図は文化財課主幹柴畑光博・主査近沢恒典が行った。
7. 本書の作成は、各担当者が作成した調査概要・写真をもとに近沢が中心となって行い、松下孝幸氏・松下真実氏・舟橋京子氏より玉稿を賜った。葉子野地下式横穴墓群(1999-1号)の報告は柴畑が担当した。
8. 現場における測量には遺跡調査システム「Site Cross」、本書に使用した図面の製図・編集には「トレースくん」・「Adobe Illustrator CS5.5」・「Adobe InDesign CS5.5」を使用している。
9. 本書の調査区位置図に示している「過年度調査調査地点」は、本年度以前に試掘調査・確認調査・記録保存を目的とする発掘調査のいずれかを実施した地点である。
10. 出土遺物及び各種記録類は、都城市教育委員会にて保管している。

目次

1. 試掘・確認調査の概要	1
2. 枠外（郡元一丁目・祝吉地区公民館）	5
3. 都城跡（取添）	7
4. 高城牧ノ原遺跡群	10
5. 宮崎県指定史跡高城町古墳（7号）／高城牧ノ原遺跡群	12
6. 大島畠田遺跡	16
7. 中床丸遺跡	20
8. 菓子野地下式横穴墓群（1999-1号）	21
9. 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓出土の古墳人骨（抄）	28
10. 菓子野地下式横穴墓群 1999-1号墓出土人骨の親族関係	38
報告書抄録	41



都城市マイブンキャラクター「いそいちくん」

都城市マイブンキャラクター「たむたむ」

1. 試掘・確認調査の概要

都城盆地は九州南部内陸部において、霧島火山群の東南のふもと、宮崎県南西部から鹿児島県北東部にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされる。基盤層は四万十累層群とされ、近隣火山群の強い影響の下、シラス台地等、火山噴出物起源の地形形成が発達している。南北に細長い盆地の周縁には標高400m程度の山地が連なり、南のみが大隅半島にむけて開口する。四方より流入する河川群は、盆地を南北に貫流する大淀川へと収束されたのち、北縁の山地帯を抜け宮崎平野へと至る。内部地形は大淀川を境に西側のシラス台地、東の扇状地性の低位段丘に大別される。

都城市は東西25km、南北35km、面積約650平方km、周縁山地を含む盆地の大半を占めている。人口規模は約16万4千人、中心的な市街地は盆地底南部の扇状地面に形成されている。

都城市内における「周知の埋蔵文化財包蔵地」は、山間部を除く各地形面にまんべんなく分布するが、大淀川やその支流沿いの河岸段丘面、台地縁部、開析扇状地の側端部における分布密度が高い。また、九州南部域では霧島火山群や桜島などの火山群から噴出したテフラが多く分布しており、遺跡調査の際の指標として利用されている。都城市内でも複数の火山灰層が確認されるが、目視同定が可能な次の6種が試掘・確認調査の際に多く利用される。霧島新燃岳享保軽石(Kr-SmK・霧島火山新燃岳起源・1717)。桜島3テフラ(Sz-3・桜島文明軽石・桜島起源・1471年)。霧島御池軽石(Kr-M・霧島火山御池起源・約4,600年前)。鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah・鬼界カルデラ起源・約6,600年前)。桜島11テフラ(Sz-11・桜島起源・約8,600年前)。桜島薩摩テフラ(Sz-S・桜島起源・約12,800年前)¹⁾²⁾。

平成28年度、民間事業に伴う埋蔵文化財の照会件数は313地点(集計数値は平成29年2月17日時点。以下同様)の記録が残り、公共事業に関しては、市内の事業調査にて150事業が把握される。前年度と比較し、民間事業は100件程度、公共事業は20件程度の増加となっている。

試掘・確認調査は民間事業において38地点、公共事業では25地点の試掘・確認調査を実施した。民間事業では個人住宅や宅地造成、福祉施設、畜舎、土砂採取等多岐にわたり、公共事業では道路拡幅、農業基盤整備事業(土層改良・天地返し)、公有地売却、史跡範囲確認等が主体となる。これらの試掘・確認調査のうち、10件を国・県の補助事業として実施した。

文化財保護法に基づく発掘届出(文化財保護法第93条関係。以後、法と略記)は39件、発掘通知(法第94条関係)は15件を宮崎県教育委員会へ進達・通知した。宮崎県教育委員会からの通知内訳は、記録保存のための発掘調査3件、工事立会い13件、慎重工事36件、事後提出に対する指導2件である。発掘調査に関しては、都城市教育委員会が主体となった調査が2件、宮崎県埋蔵文化財センターが主体となった調査が2件(1件は平成27年度からの継続事業)である。

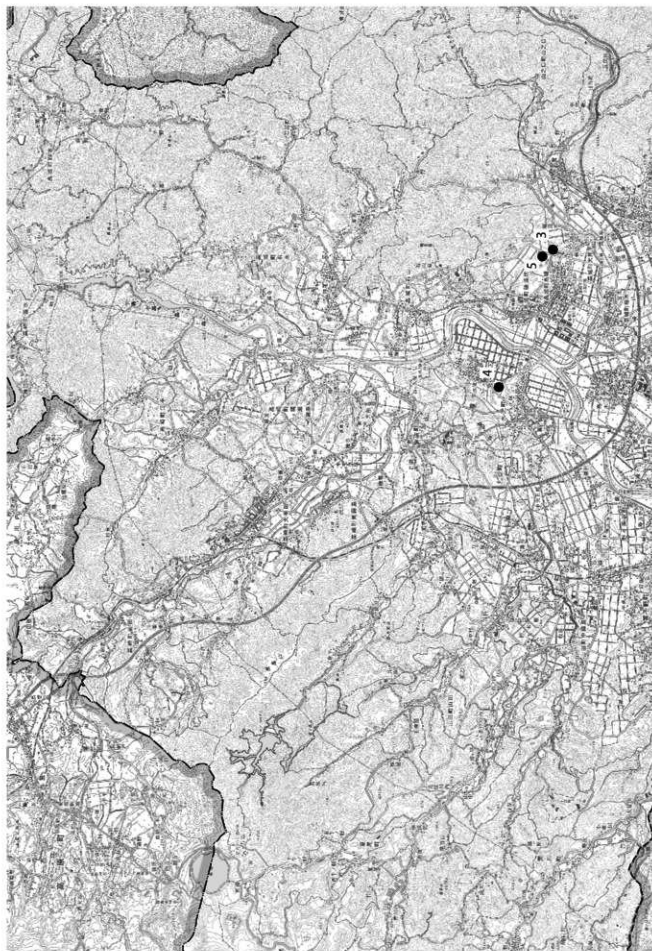
菓子野地下式横穴墓群(1999-1号)は、平成11年8月に耕作中の陥没によって発見された地下式横穴墓である。現在まで未報告となっていたが、都城の古墳時代を考える上で重要な資料であるため、本書にて合わせて概要を報告する。

調査組織は次のとおりである。

調査主体 都城市教育委員会

教育長	黒木哲徳
教育部長	児玉貞雄
文化財課長	山下進一郎
副課長	武田浩明
主幹	柴畑光博
調査担当	柴畑光博 栗山葉子 近沢恒典 山下大輔 加覧淳一 中岡剛史 原栄子
	外山亜希子 川俣唱子
庶務	畑中夏奈

1) 早田勉、2006、84 都城盆地とその周辺に分布するテフラ(火山灰)、「都城市史 資料編 考古」:609-629、都城市。
2) テフラの年代は1)の暦年較正年代を用いている。



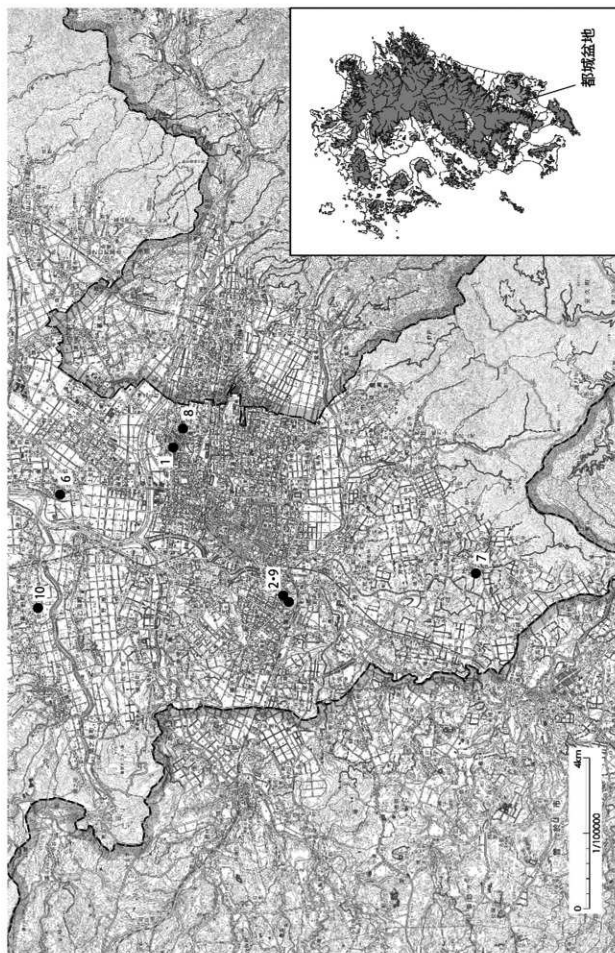


図1. 試掘・確認調査地点 (No. は表1と一致)

表 1. 試掘・確認調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	調査期間	主な時代	主な遺構・遺物	備考
1	杵外(部元一丁目・祝古地区公民館)	部元一丁目1-5ほか	その他建物(公民館)	5/17	弥生・古墳・中世	ピット・土器・鉄線	範囲拡大
2	都城跡(仮設)	都島町520-1	個人住宅	5/26	中世	堀・陶磁器	
3	高城牧ノ原遺跡群	高城町大井手3564	農業関連事業(畜舎)	7/25	古墳	周溝?・須磨器	
4	志和里村古墳(7号)(高城跡・築地地下式横穴墓)	下永流町2576-1ほか	農業関連事業(畜舎)	7/26～9/1	弥生・古墳・近世	地下式横穴墓・溝状遺構・赤生土器・土師器・須磨器	7/4地中レーダー
5	高城町古墳(7号)(高城牧ノ原遺跡群)	高城町大井手3445	その他開発(太陽光発電施設)	8/17～18	古墳	周溝・地下式横穴墓・溝状遺構・土師器	
6	大島富田遺跡	金田町970ほか	公園整備(公衆トイレ)	8/22～29	古代・中世	水田跡・土師器・陶磁器	
7	中庄丸遺跡	梅北町	道路拡幅(市道高見堂・豊満線)	10/26	時期不明	ピット	
8	杵外(部元町・部元(西原)遺跡)	部元町3337ほか	遺跡範囲確認	11/29～12/16	古代・中世	溝状遺構・ピット・古代土師器・黒色土器・陶磁器	
9	都城跡(仮設)	都島町579ほか	遺跡範囲確認	12/5～12/28	中世・近世	堀・土塁・溝状遺構・陶磁器	
10	菓子野地下式横穴墓群(1999-1号)	菓子野19579-1	自然破壊	1999/9/1～14	古墳	地下式横穴墓・鉄剣・鉄線・土師器	



築池地下式横穴墓群 2016-5号：羨門脇遺物出土状況



築池地下式横穴墓群 2016-5号：人骨出土状況

2. 枠外 (郡元一丁目・祝吉地区公民館)

所在地 郡元一丁目1-5ほか
 調査原因 祝吉地区公民館建設
 調査期間 2016.5.17

調査面積 20㎡
 担当者 加賀淳一・近沢恒典
 調査後の措置 記録保存

位置と環境 開発予定地は盆地底南部に広がる開析扇状地面(一万城扇状地)の北縁域に位置している。現況は宅地である。

周辺域では、1985年～2001年にかけて実施された区画整理事業に伴う発掘調査にて、多数の遺跡が確認されている。開発予定地の北に隣接する「松原地区遺跡群」(縄文・弥生・古墳・中世・近世)では、台地縁部を中心に、大規模な溝状遺構で囲まれた中世から近世にかけての屋敷地が確認されている。北東側に位置する「久玉遺跡」(縄文・古墳・中世・近世)でも、台地縁部を中心に、同時期の屋敷跡が確認されている。このように、区画整理事業に伴う調査では、中世から近世にかけての屋敷地の様相とその変遷が調査成果の中心となっているが、一部では縄文時代後期、古墳時代の遺構・遺物も確認されている¹⁾。

今回の開発予定地は台地縁部でもやや内部に位置しており、台地縁辺を主体とする遺跡の広がりを確認する上で貴重な調査事例となると考えられた。

調査の結果 トレンチ5箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土(1層)、褐灰色砂質土(2層)、桜島文明軽石(3層)、黒褐色土(4・5層)、霧島御池軽石(6層)、黒色土(7層)、鬼界アカホヤ火山灰(8・9層)となる。5Tでのみ6層以下の調査を実施したが9層にて湧水したため、掘り下げを中止した。

すべてのトレンチにおいて、4層中より弥生土器片、古墳時代土器片、中世土器片が出土し、3Tでは鉄鉄片が出土した。遺構検出は5層上面で行い、1T・4Tにて柱穴3基を検出した。埋土の様相より中世期の所産と考えられた。

以上の結果より、開発予定地には弥生時代・古墳時代・中世の遺物包含層および中世の建物跡を主体とする遺跡が良好な状態で残存している可能性が高いと判断した。この結果に基づき「松原地区遺跡群」の範囲を開発予定地まで拡大した。

また、試掘調査に基づく協議の結果、祝吉地区公民館建物の新築に際し遺跡に影響が及ぶ範囲において、記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。



図1. 調査区位置



図2. トレンチ配置

1) 郡城市, 2006.『郡城市史 資料編 考古』

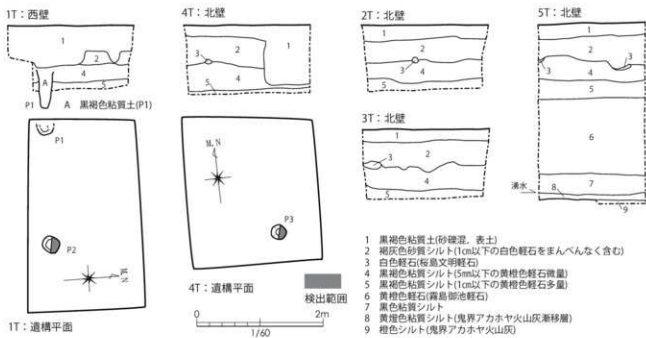


図3. トレンチ土層・平面



図版1. 全景(西から)



図版2. 1T:ピット検出(西から)



図版3. 4T(西から)



図版4. 3T:遺物出土状況

3. 都城跡 (取添)

所在地 都島町 520-1
 調査原因 住宅建設
 調査期間 2016.5.26

調査面積 46㎡
 担当者 近沢恒典・外山亜希子
 調査後の措置 工事立会 (現状保存)

位置と環境 開発予定地は中世城郭「都城」の「取添」曲輪とその西側に構築された「堀」部分にあたる。「都城」は都城盆地南西部に広がるシラス台地(養原台地)の東端部を分割形成した中世城郭であり、大淀川を背後にした「本丸」から西へと城域を展開させる。都城盆地の中核的城郭であり、北郷氏の拠点城郭として継続的に使用された。

「取添」は「本丸」や「西城」、「池之上城」、「中尾之城」などの中核部を見下ろす台地縁部を直線的な堀で区画して形成された曲輪であり、八巻氏の各曲輪分類¹⁾では「台地縁グループ」に分類される。築城理由として

1) 八巻孝夫, 2004, Ⅲ. 主要城館解説_1. 都城跡, 『都城の中世城館(改訂版)』: 15-20, 都城教育委員会



図1. 調査区位置 (八巻孝夫 1991¹⁾ を一部改変)

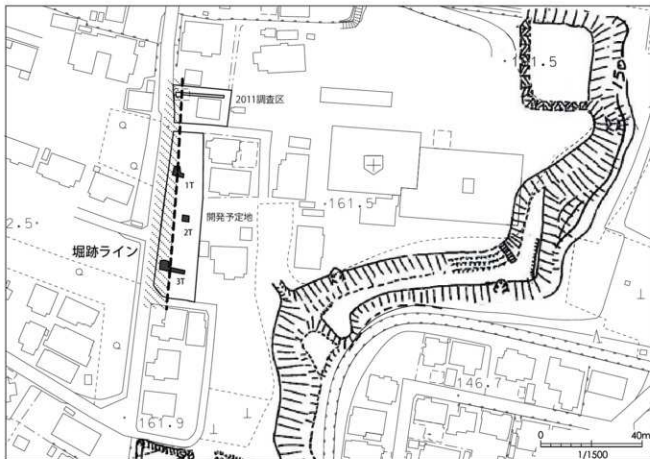
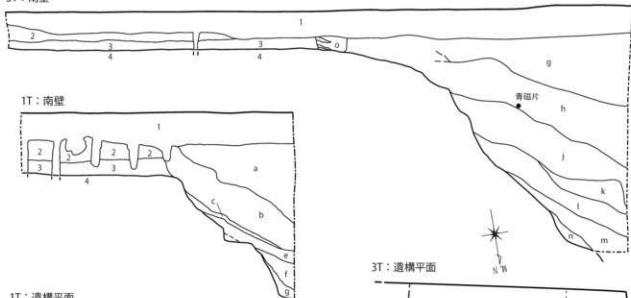
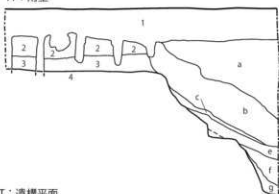


図2. トレンチ配置 (八巻孝夫 1991¹⁾ を一部改変)

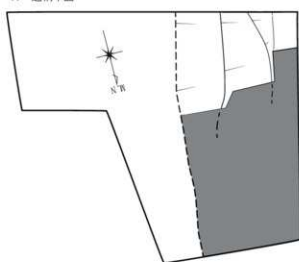
3T：南壁



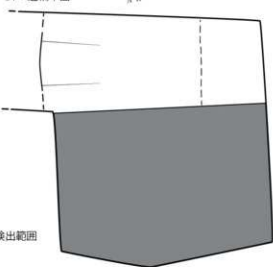
1T：南壁



1T：遺構平面



3T：遺構平面



■ 検出範囲

- 1 灰褐色砂質シルト(7cm以下の黄褐色軽石・灰白色軽石含む)
- 2 黒色シルト(1cm以下の黄褐色軽石ごくわずか)
- 3 黒褐色シルト(3cm以下の黄褐色軽石を含む)
- 4 暗褐色シルト(露島御池軽石新移層)

堀埋土

- a 灰黄褐色砂質土(灰褐色シルトブロック・5mm以下の黄褐色軽石・2cm大のアカホヤブロック含む)
- b 黒褐色砂質土(5mm以下の黄褐色軽石・2cm大のアカホヤブロック少量。灰白色軽石わずか)
- c 灰黄褐色砂質土(5mm以下の黄褐色軽石含む)
- d 黒褐色シルト(5mm以下の黄褐色軽石わずか)
- e 黒褐色シルト(1cm以下の黄褐色軽石わずか)
- f 黒色シルト(1mm以下の黄褐色軽石わずか)
- g 黒褐色シルト(1cm以下の黄褐色軽石含む)
- h 黒～暗褐色砂質土(黄褐色軽石・白色軽石・黒色土ブロック含む)
- i 暗褐色砂質土(アカホヤブロック・褐色土ブロック・黄褐色軽石・白色軽石・砂利含む)
- j 黒褐色砂質土(1cm以下の黄褐色軽石・白色軽石・アカホヤブロック・砂利含む)
- k 褐色砂質土(5cm程度の砂利。アカホヤブロック・黄褐色軽石・白色軽石含む)
- l 黒褐色砂質土(5cm以下のアカホヤブロック・褐色土ブロック・1cm以下の黄褐色軽石・白色軽石含む)
- m 黒褐色～暗褐色砂質土(5cm以下のアカホヤブロック・1cm以下の黄褐色軽石・アカホヤ粒子含む)
- n 暗褐色砂質土(1cm以下の黄褐色軽石・2cm以下の黒色土ブロック・アカホヤ粒子含む)
- o 黒褐色シルト(黄褐色軽石含む。白色軽石が層状に含まれる)

2T：西壁

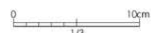
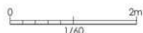
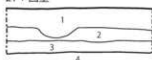


図 3. トレンチ土層・平面/出土遺物

は、城内を見下ろす台地縁部がもたらす防御上の不安の除去と屋敷地の確保が想定されている。また、文化・文政年間の編纂資料である「庄内地理志」²⁾には「取添城 伊集院幸侃都城之時取添也」とあり、伊集院氏が都城を支配していた1595年(文禄4年)～1600年(慶長5年)に形成されたものと考えられている。1615年(元和元年)の状況を示すとされる古絵図「竹之下御城図」では直線的な堀とその内側に家臣団の名がみえ、屋敷地として利用されていたことがわかる。

周辺では2011年、2010年、2009年を実施された確認調査にて堀跡が確認され、その走方向が推定されている³⁾。現況は平坦な畑地である。

調査の結果 トレンチ3箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は現耕作土(1層)、黒色土(2層)、黒褐色土(3層)、霧島御池軽石層(4層)、堀埋土(a～n層)に大別される。いずれのトレンチでも4層にて遺構検出を行った。

1・3Tではトレンチの西壁に沿って、大規模な掘り込みが確認された。2011年度調査区から続く堀と考えられる。1Tでは中に一段の狭い平坦面が観察され、3Tでは現地表面から深さ4mを超えたが底面を検出することはできなかった。3Tのh層及びm層より中世青磁片(1)が出土した。2Tでは遺構・遺物の出土は確認されなかった。

以上の結果より、開発予定地には堀が確認された西側部分を中心に、現地表面より40cm以下において、中世の遺跡が良好な状態で残存している可能性が高いと判断した。また、今回の調査において現地表面下4mまで掘り下げても堀の底面が確認できなかった点からは、この堀がそれ以上の深さを持つ非常に大規模な構造であった可能性が考えられた。

2) 都城市, 2003.『都城市史 資料編 近世3』
3) 都城市教育委員会, 2012.『都城市内遺跡5』



図版 1. 3T:堀(北から)



図版 2. 3T:トレンチ底部付近(南壁土層)



図版 3. 1T:堀底部付近(南壁土層)

4. 高城牧ノ原遺跡群

所在地 高城町大井手 3564
 調査原因 畜舎増築
 調査期間 2016.7.25

調査面積 21.6㎡
 担当者 中園剛史・山下大輔
 調査後の措置 慎重工事

位置と環境 開発予定地は盆地北東部、大淀川と東岳川の合流点のやや北に位置するシラス台地面（高城台地）の東南縁部に立地している。周辺には宮崎県指定史跡高城町古墳として前方後円墳3基、円墳10基、未指定円墳1基が展開している。また、過去の調査により地下式横穴墓18基、箱式石棺墓7基、木棺直葬墓1基、土坑墓4基が検出され、多様な墓制の展開が確認されている^{1),2)}。

開発予定地は前方後円墳である指定古墳(3号)の東側に隣接している。周辺域には複数棟の畜舎が建ち並び、そのうちの古墳に最も近い1棟の増築計画が今回の調査起因である。

調査の結果 建物の柱設置予定地部分を中心にトレンチ15箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

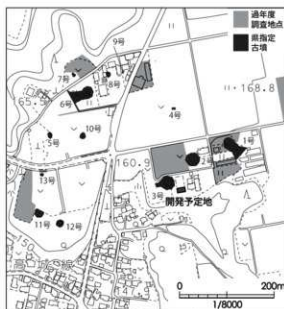


図1. 調査区位置

- 1) 高城町教育委員会. 2005. 「牧ノ原遺跡群」
- 2) 郡城市教育委員会. 2009. 「市内遺跡2」

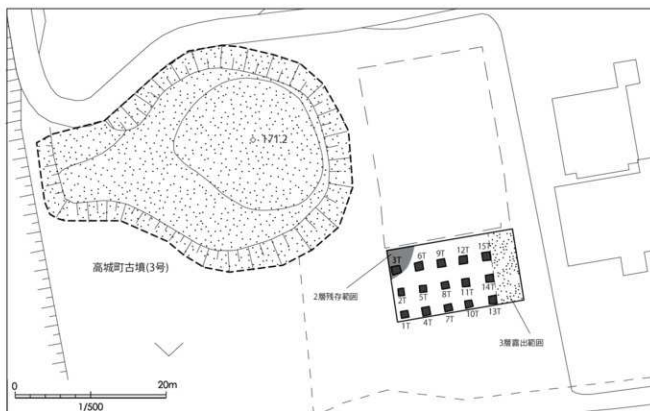


図2. トレンチ配置

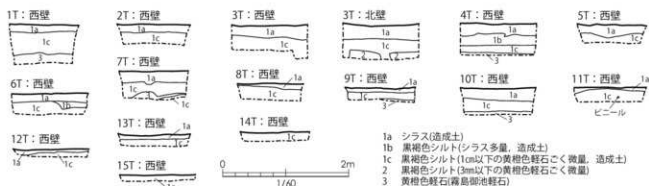


図3. トレンチ土層

基本的な層序は造成土(1層)、黒褐色土(2層)、霧島御池軽石(3層)に大別される。掘り下げは3層上面もしくは柱設置によって影響を受ける深度にとどめた。また、開発予定地の東側4分の1程度は、既に3層が露出していた。

3T以外のトレンチでは1層直下が3層となり、3層の上位が削平されている状況がうかがえた。5T・1層にて須恵器片が出土したほかは、いずれのトレンチでも遺物の出土はなく、3層が露出している東側を含め、明確な遺構は確認されなかった。3Tでは2層の堆積が観察され、それがさらに下位へと続く状況が推測された。墳丘に最も近い部分であり、周溝の可能性も考えられたが、全体地形が同じ方向へ向かって緩やかに傾斜している点もあり、周溝との断定はできていない。

以上の結果より、開発予定地の大部分は3層まで削平を受けており、良好な遺跡が残存している可能性は低いと判断した。



図版1. 1T(西から)



図版2. 3T(南から)



図版3. 12T(東から)



図版4. 全景：奥が3号墳

5. 宮崎県指定史跡高城町古墳(7号)ノ高城牧ノ原遺跡群

所在地 高城町大井手3445
 調査原因 太陽光発電施設建設
 調査期間 2016.8.17-18

調査面積 50㎡
 担当者 山下大輔・川俣唱子
 調査後の措置 工事立会(現状保存)

位置と環境 開発予定地は盆地北東部、大淀川と東岳川の合流点のやや北に位置するシラス台地面(高城台地)にあり、台地を東西に二分する谷地形に面した台地縁部に立地している。周辺には宮崎県指定史跡高城町古墳として前方後円墳3基、円墳10基、未指定円墳1基が展開している。また、過去の調査により地下式横穴墓18基、箱式石棺墓7基、木棺直葬墓1基、土坑墓4基が検出され、多様な墓制の展開が確認されている¹⁾²⁾。

開発予定地は円墳である指定古墳(7号)の北～東側に隣接している。道を挟んだ南側にある6号墳では農道建設に伴う調査で箱式石棺1基(2009年)、8号墳では削平・攪乱が進行していたものの、浅い周溝の残存が確認されている(2011年)。

調査の結果 トレンチ7箇所を設定し、重機・人力



図1. 調査区位置

- 1) 高城町教育委員会. 2005. 「牧ノ原遺跡群」
- 2) 郡城市教育委員会. 2009. 「市内遺跡2」

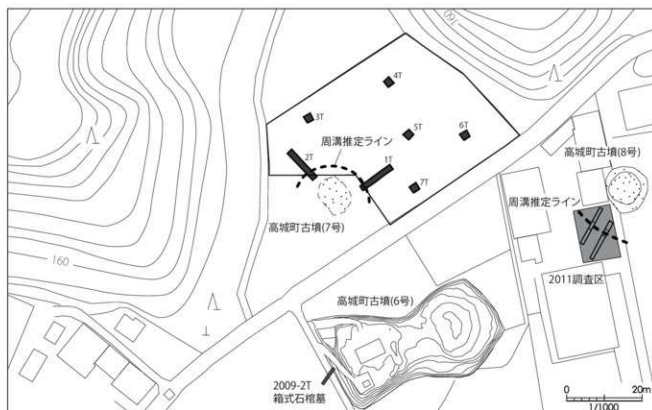
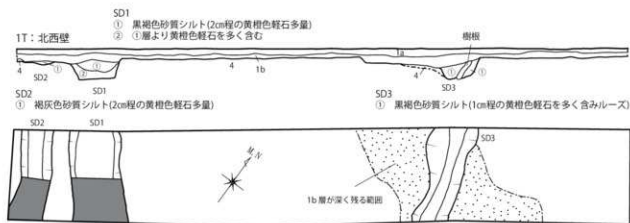


図2. トレンチ配置

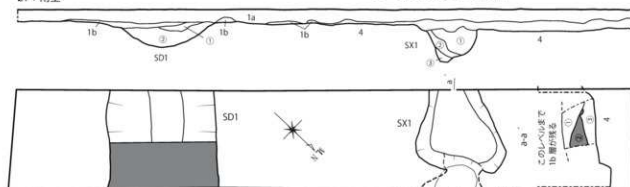


1T: 遺構平面

■ 検出範囲

- SX1
① 黒褐色砂質シルト(2cm程の黄褐色軽石多量)
② ①層より黄褐色軽石を多く含み固くしまる
③ 黄褐色軽石ブロック+②層

2T: 南壁



2T: 遺構平面

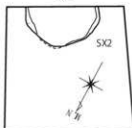
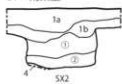
- 1a 灰褐色砂質土(白色軽石多量、固くしまる、表土)
1b 1a層+黄褐色軽石ブロック(造成土)
2 黒褐色粘質シルト(黄褐色軽石をまばらに含む)
3 黒褐色粘質シルト(黄褐色軽石多量)
4 黄褐色軽石(霧島御池軽石)

- SX1 a-a'
① 黄褐色軽石(霧島御池軽石の2次堆積)
② 黒色土ブロック
③ 黄褐色軽石(霧島御池軽石の2次堆積)

- SX1 b-b'
①・③・⑤・⑦ 黄褐色軽石ブロック
②・④ 黒色粘質土(黄褐色軽石ブロックをまばらに含む)
⑥ 黒色粘質土



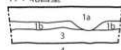
3T: 南東壁



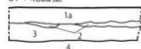
3T: 遺構平面

- SX2
① 黒色砂質土(2cm程の黄褐色軽石多量)
② ③層+黄褐色軽石ブロック

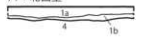
4T: 北西壁



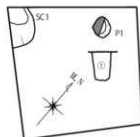
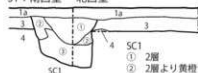
6T: 北西壁



7T: 北西壁



5T: 南西壁 北西壁



5T: 遺構平面

- P1
① 黒褐色砂質土(黄褐色軽石を多く含みルーズ)

図3. トレンチ土層・平面

にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土・造成土(1層)、黒褐色土(2・3層)、霧島御池軽石(4層)に大別される。全体的に削平が進行しており、1T・2T・7Tでは1層直下が4層となっていた。

遺物包含層である2・3層が残存していた4～6Tでは、4T・3層にて黒曜石片、5Tにて古墳時代土師器小片が出土した。

遺構検出は4層にて行った。1Tでは溝状遺構3条(SD1～3)、2Tでは溝状遺構1条(SD1)と地下式横穴墓と考えられる遺構(SX1)が確認され、3Tでも同様の遺構(SX2)が検出された。また、5Tでは土坑(SC1)、柱穴(P1)を検出した。

SD1は現存幅0.8～1.6m・検出面からの深さ0.3～0.4mと比較的しっかりと掘り込みをもつ点、1Tの検出面にて古墳時代土師器小片が出土した点、墳丘を取り巻く位置関係より、7号墳の周溝であった可能性が高い。SD2・3は遺構に伴う遺物の出土はなく、帰属時期は不明である。

SX1は南西側の台形状の平面形をした掘り込みに、北東側の楕円形状の掘り込みが接続したような平面形態をしており、地下式横穴墓と考えられる。南西側の掘り込みは、平面形態や平坦な床面、霧島御池軽石ブロックが混じる埋土より堅坑、一段下がる北東側が玄室と捉えられる。また、堅坑土層a-a'の中位にみられる黒色土ブロック(②層)は、位置関係より羨門閉塞に使用された黒色土ブロックの端部と推測された。玄室天井は崩落していた。SX1は遺構の一部の調査に留まるが、構築深度が浅く、小型でやや不整な平面形態、土塊と推測される閉塞、霧島御池軽石主体の堅坑埋土等、周辺域での調査事例との共通性が高い¹⁾。SX2は平坦な床面や埋土の様相より堅坑の一部である可能性が考えられた。

以上の結果より、開発予定地には7号墳を中心に周溝・地下式横穴墓等で構成される古墳時代の遺跡が存在している可能性が高いと判断した。

1) 高城町教育委員会、2005。「牧ノ原遺跡群」



図版 1. 1T：検出状況（西から）



図版 2. 1T：SD1・2（南から）



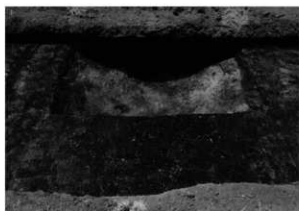
図版 3. 1T：SD3（南から）



図版 4. 2T：検出状況（東から）



図版 5. 2T: SX1 (西から)



図版 6. 2T: SD1 (北東から)



図版 7. 3T: SX2 (北西から)



図版 8. 5T: SC1・P2 (南から)



図版 9. 調査前 (北東から)



図版 10. 調査後 (北東から)



図版 11. 作業状況



図版 12. 重機使用状況

6. 大島畠田遺跡

所在地 金田町 970 ほか
 調査原因 公園整備（公衆トイレ）
 調査期間 2016.8.22-29

調査面積 20㎡
 担当者 原栄子・川俣唱子
 調査後の措置 慎重工事

位置と環境 大島畠田遺跡は都城盆地のほぼ中央に広がる開析扇状地面（高木原扇状地）の西端部、扇状地面に三方を囲まれた入り江状の沖積低地面に立地している。西側に広がる大淀川（のび）の氾濫原（沖積低地面）との比高差は約 1.5 m である。現地形はほぼ平坦であるが、扇状地面と接続する北側から遺跡南端部の浅い谷地形へ向けて緩やかに下る。

遺跡の主体は平安時代中期の有力者居宅跡であり、大型掘立柱建物跡や門跡、池状遺構、柵列等で構成される。当該期の居宅跡の全容が把握できる全国的にも稀有な遺跡であり、国指定史跡（2002 年指定）となっている。1999 年に行われた「ほ場整備事業」に伴う発掘調査¹⁾の後、2000 年²⁾、2011 年³⁾、2012 年⁴⁾に範囲確認等を目的とした数次にわたる確認調査が実施されている。

基本層序は次のようにまとめられている⁴⁾。1 層：霧島新燃岳平成テフラ、2 層：本調査（1999）の埋戻し土、3 層：シラス（遺構保護層）、4 層：現代水田耕作土、5 層：昭和耕地整理時盛土、6 層：旧耕作土、7 層：灰色砂質シルト（白色軽石多く含む）、8 層：白色軽石（桜島文明軽石）、9 層：灰色系粘土質シルト・シルト（中世遺物包含層）、10 層：灰白色～オリーブ黒色砂質シルト・砂・礫混じり砂（平安時代末～中世初頭洪水堆積物）、11 層：黄灰色・暗灰黄色粘土質シルト（平安時代遺物包含層）、12 層：オリーブ褐色粘土質シルト・灰黄色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルト・シルト・砂・黄色軽石（平安時代遺構検出面）、13 層：砂混じり礫層。

今回の調査区周辺は「居宅跡南側の浅い谷（D エリア）」で「埋没旧河道推定ライン」内にあたり、居宅跡造営期は洪水・氾濫の影響下にあったと推定されている⁴⁾。

調査の結果 浄化槽設置部分のほぼ全域にトレンチを設定し、重機にて表土を除去したのち、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

層序は本調査時の埋戻し土（1 層≒基本層序 2 層（以下、基本〇層と略記））、近現代の水田層（2～6 層≒基本 4～6 層）、桜島文明軽石（7 層≒基本 8 層）、桜島文明軽石以前の水田層（8・9 層≒基本 9 層）、洪水堆積層と泥炭質黒褐色シルト及び暗褐色シルトの互層（10～16 層≒基本 10～12 層）に大別される。

11 層（≒基本 11 層）にて平安時代の土師器小片（1・2）が出土したため、12 層上面で遺構検出を実施したが、明確な遺構は確認されなかった。1 は底部が円盤高台状となる環であり、大島畠田遺跡分類の環Ⅶ類にあたる³⁾。2 は高台内に放射状の圧痕をもつ塊である。高台内に放射状の圧痕を施した後、

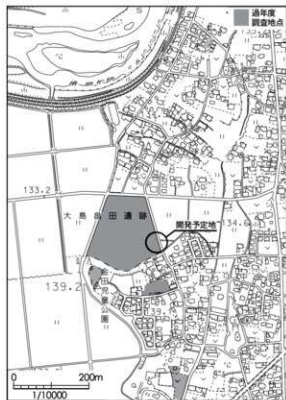


図 1. 調査区位置

1) 宮崎埋蔵文化財センター。2000。「大島畠田遺跡-農業用地整備事業「都城区域」区画整理に伴う発掘調査概要報告書」
 2) 都城教育委員会。2000。「大島畠田遺跡」
 3) 宮崎埋蔵文化財センター。2008。「国指定史跡 大島畠田遺跡」
 4) 都城教育委員会。2013。「国指定史跡 大島畠田遺跡 平成 23・24 年度確認調査報告書」

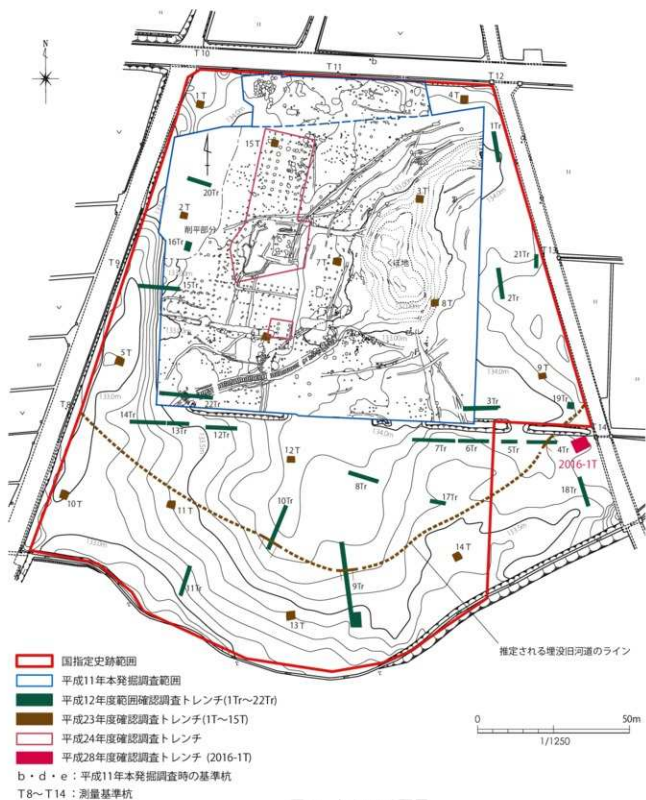
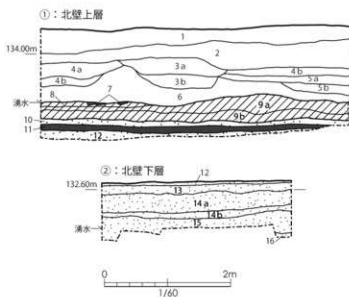
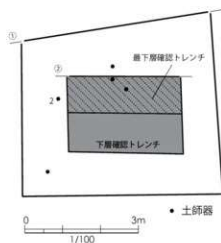


図2. トレンチ配置

高台に沿って強い指ナデの痕跡が一周する。いずれも9世紀後半から10世紀初頭の在り土師器と考えられ、大島富田遺跡が居宅地として機能していた時期の遺物と捉えられる。12層以下は遺物の出土はなく、平安時代以前の形成層と把握された。

以上の結果より、開発予定地には密度の薄い平安時代の遺物包含層は存在するものの、居宅跡に伴う明確な遺構が存在する可能性は低いと考えられた。また、今回の調査地点では河川氾濫起源のシルト層は観察されたものの、礫層等はみられず、河川流路本体とはやや距離があった可能性も考えられた。



- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| 1a 褐色粘質土(本調査時の腐土、表土) | 9a 灰色粘質土(5mm以下の白色軽石含む) |
| 2 灰褐色弱粘質土 | 9b 灰色粘質土(5mm以下の白色軽石微量) |
| 3a 灰褐色土(砂・礫含む、攪乱) | 10 灰色粘質シルト+黒褐色粘質土 |
| 3b 灰褐色土(礫含む、攪乱) | 11 黒褐色粘質シルト(古代遺物包含層) |
| 4a 暗褐色弱粘質土(5mm以下の黄褐色・白色軽石含む) | 12 灰白色粘質シルト |
| 4b 暗褐色弱粘質土(4a層よりやや暗い) | 13 暗褐色粘質シルト |
| 5a 褐色弱粘質土(白色軽石多量、礫・黄色土ブロック含む) | 14a 灰白色粘質シルト |
| 5b 褐色弱粘質土(白色軽石多量、黄色土ブロックをわずかに含む) | 14b 灰白色粘質シルト(砂混) |
| 6 暗褐色粘質土(黄色土ブロック多量、5~10cm程度の礫含む) | 15 暗褐色粘質シルト |
| 7 白色軽石(桜島文明軽石) | 16 暗緑灰オリブ色砂質土 |
| 8 暗褐色粘質土(5mm以下の白色軽石多量) | |

図3. トレンチ土層・平面

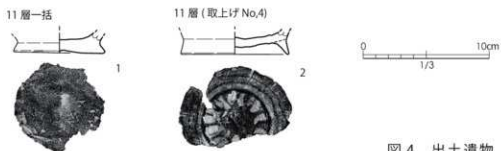


図4. 出土遺物



図版1. 重機使用状況(表土掘削)



図版2. シラスを用いた埋戻し



図版 3. 作業状況



図版 4. 遠景 (北西から)



図版 5. 12層上面 (南西から)



図版 6. 完掘 (南から)



図版 7. 完掘 (南東から)



図版 8. 土層 (北壁)



図版 9. 土層 (北壁・上層)



図版 10. 土層 (北壁・下層)

7. 中床丸遺跡

所在地 梅北町(市道高見堂・豊満線)
 調査原因 道路拡幅
 調査期間 2016.10.26

調査面積 8㎡
 担当者 近沢恒典・川俣唱子
 調査後の措置 協議中

位置と環境 開発予定地は盆地南部、梅北川流域に展開するシラス台地・成層シラス台地群(梅北台地)の南部域にあり、梅北川と床丸川の合流点のやや南、両河川に挟まれた成層シラス台地面に立地している。北側には床丸川へ続く谷地形が形成され、開発予定地はその谷頭付近にあたる。現況は畑地である。

周辺域では道路事業などに伴い、確認調査・本発掘調査が数多く実施されており、その多くで良好な遺跡の存在が確認されている。

調査の結果 トレンチ3箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土・造成土(1・2層)、黒褐色土(3層)、霧島御池軽石(4層)、鬼界アカホヤ火山灰(5・6層)、桜島11火山灰(7層)、暗褐色～黒褐色土(8・9層)に大別される。

1Tではピット2基が確認された。P1は7層下位、P2は6層上面の検出だが、埋土の様相から4層より上から掘り込まれた遺構と考えられた。遺物は出土していない。2・3Tでは厚い造成土層が確認された。地元の話では、昭和30年代に2m以上の盛土をして畑を造成したとのことであり、この造成土層はその際の形成層と推定された。

以上の結果より、開発予定地には1T付近においてのみ、遺跡が残存している可能性が高いと判断した。



図1. 調査区位置

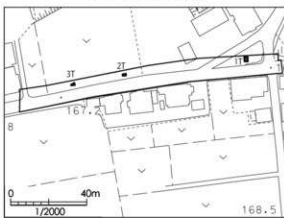


図2. トレンチ配置

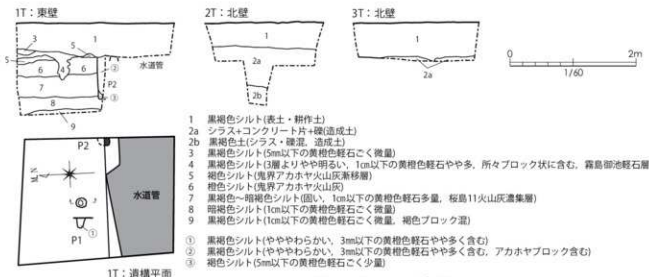


図3. トレンチ土層・平面

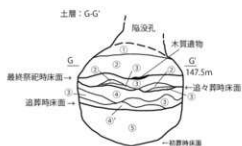
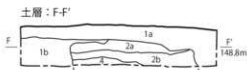
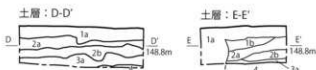
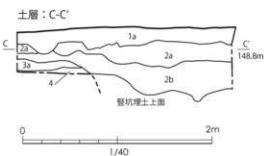
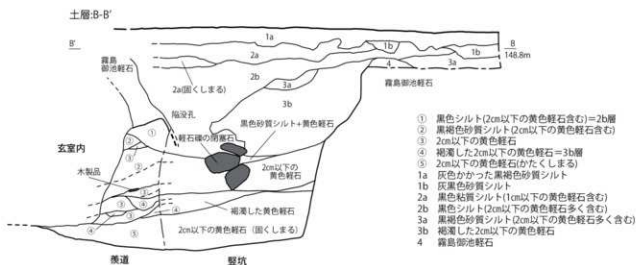
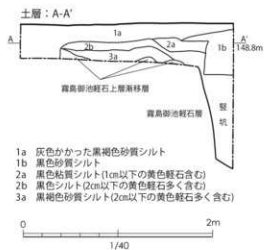
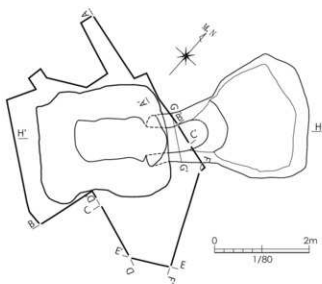


図3. トレンチ設定及び土層断面

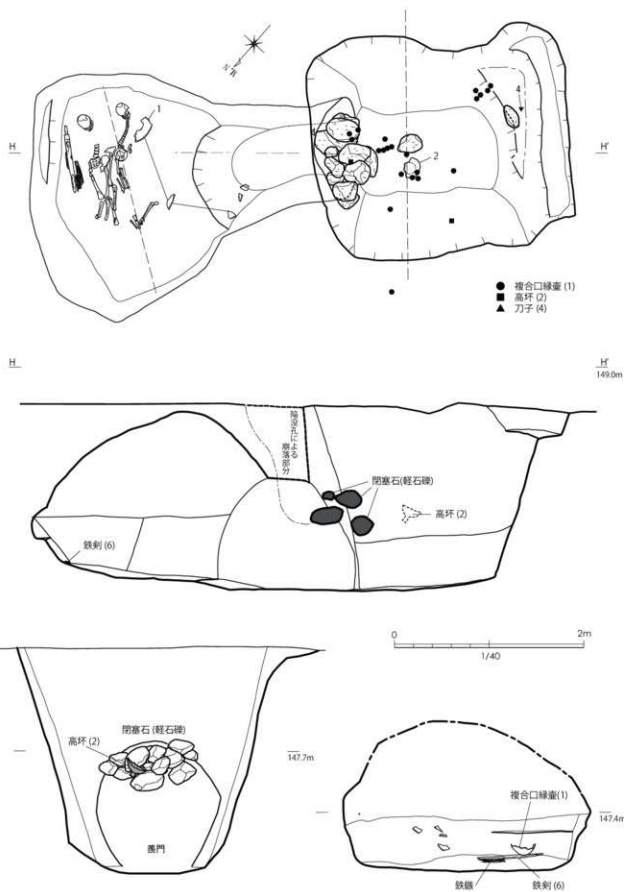


図4. 遺構平面及び見通し

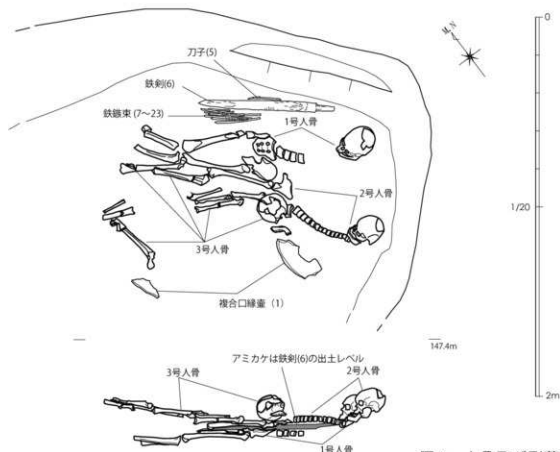


図5. 人骨及び副葬品出土状況

上層で出土した破片と接合した。玄室天井部の崩落土を取り除きながら、人骨の検出とそれに伴う副葬品の調査を行った。最初に玄室の中央付近で保存状態の悪い人骨（3号人骨）が見つかり、その下から、頭を南東方向に向けた比較的保存状態のよい人骨（2号人骨）を検出し、玄室の奥壁よりにやはり頭を南東方向に向けた保存状態のよい人骨（1号人骨）を検出した。人骨の実測と取上げの後、玄室奥壁沿いに鉄剣1点（6）、鉄鍬17点（7～23）、刀子1点（5）が検出された。鉄剣には、鞘の木質が残っており、樹皮が巻かれている。茎には目釘穴が2箇所観察される。鉄鍬は腐食によって錆着しており、取り上げ時には表面に断片的な布の付着が認められた。大半の鉄鍬は矢柄が残存しており、樹皮巻きも観察される。鉄鍬の形態は、圭頭式が4点（7～10）、いわゆる長頸鍬が13点（11～23）である。これらは1号人骨埋葬時の副葬品と考えられる。調査時の所見では、1号人骨が初葬、その次に2号人骨の埋葬、最後に2号人骨を奥壁側に寄せた後3号人骨の埋葬という順番が推察された。3号人骨は遺体埋葬後、ある程度時間をおいてから意図的に乱された状態だった。また、破片がばらばらになって見つかった複合口縁壺1点と竪坑中位で見つかった高環1点は、1号人骨埋葬時の供献品の可能性もあるが、壺は最終埋葬者である3号人骨を乱した後に破砕されて玄室・羨道・竪坑埋土に撒かれたものと思われる。高環は脚部を打ち欠いて竪坑埋土中位に埋納されたと推定される。壺の形態は他に類例がないが、高環の形態は、近沢恒典氏による都城盆地の古墳時代土器編年の表2f段階¹⁾に該当すると思われるので、6世紀前半に位置づけられると考えられる。

竪坑の平面プランは、長軸約2.72m、短軸約2.36mの隅丸方形で、検出面からの深さ約2.34mである。羨道は幅約1.6m、高さ約1.1mである。玄室の平面プランは、長軸約2.15m、短軸約1.24mの奥壁側が広がる略台形で、いわゆる平入りの形態となる。また、奥壁の壁面には長さ0.9m、幅0.1mの棚状の段が設けられていた。

1) 近沢恒典, 2016. 「都城盆地の古墳時代の土器」, 『宮崎県史地域の考古資料に関する編年研究Ⅱ』, 宮崎考古学会

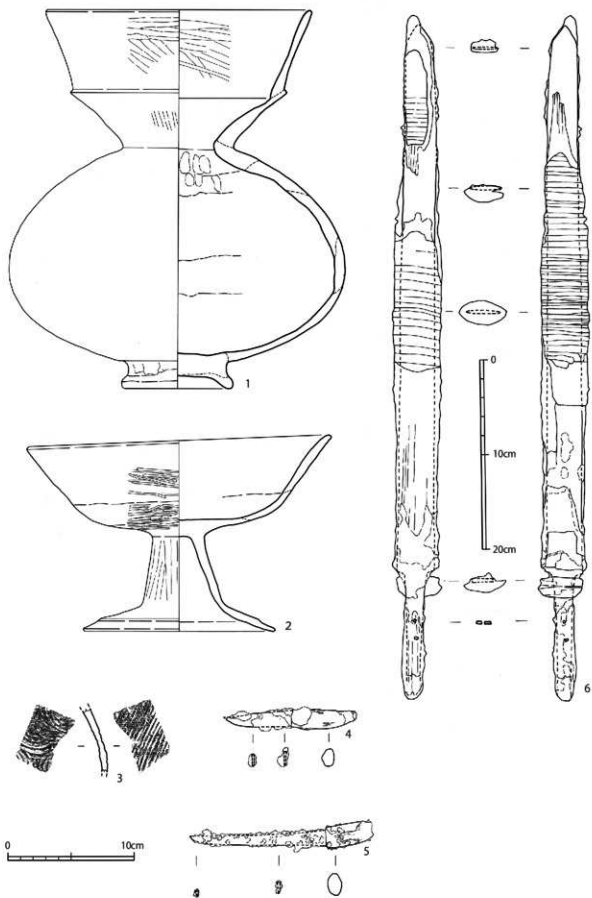
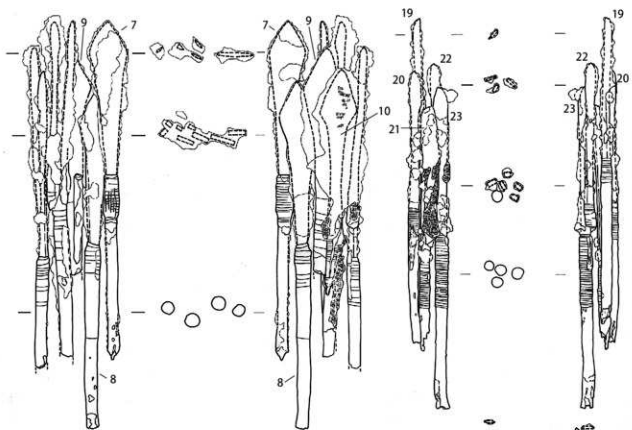
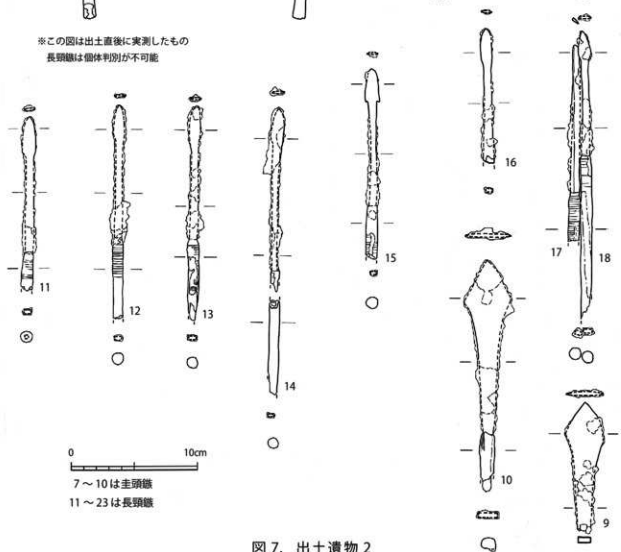


图 6. 出土遺物 1



※この図は出土直後に実測したもの
長頭鏝は個体判別が不可能



0 10cm

7～10は主頭鏝
11～23は長頭鏝

図7. 出土遺物 2



図版 1. 竪坑上面遺物出土状況



図版 2. 竪坑埋土上層刀子出土状況



図版 3. 閉塞石・高坏出土状況



図版 4. 羨道土層断面



図版 5. 玄室内全景



図版 6. 人骨・複合口縁壺出土状況



図版 7. 鉄剣・鉄鏃・刀子出土状況



図版 8. 出土遺物

9. 宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓出土の古墳人骨(抄)

松下孝幸^{*}・松下真実^{**}

^{*}Takayuki MATSUSHITA, ^{**}Masami MATSUSHITA

菓子野地下式横穴墓群 1999-1号墓、2000-1号墓、2001-1号墓の調査では松下孝幸氏に人骨の取り上げ及び形質に関する報告をいただいた。本報告書においては、紙数の関係より、1991-1号墓出土人骨の報告について掲載する。

はじめに

宮崎県都城市菓子野町は下水流町とともに地下式横穴が密集する地域として知られており、前者は菓子野地下式横穴墓群と、後者は築池地下式横穴墓群と呼称されている。菓子野地下式横穴墓群から出土した人骨に関しては、1980(昭和55)年と1982(昭和57)年に出土した人骨について松下(松下・他、1983)が、1984(昭和59)年に出土した人骨については小片ら(小片・他、1986)が報告している。

1999(平成11)年、2000(平成12)年、2001(平成13)年にそれぞれ1基ずつ地下式横穴墓が発見され、発掘調査がおこなわれ、この3基の横穴墓からはそれぞれ3体ずつの人骨が検出された。これまでの調査で、菓子野地下式横穴墓群11基から出土した合計25体の人骨を基にした形質についての考察は都城市史(松下、2006)に記載したが、この3年間に出土した9体の人骨については個々の所見を報告していないので、今後の研究に資するために本稿でこの9体に関する報告をおこなった。

資料

1999-1号墓は1999(平成11)年9月に発見され、発掘調査がおこなわれている。今回報告する古墳人骨は表1に示すとおり3体である。各横穴墓から出土した人骨の性別・年齢は表2に示した。なお、年齢区分は表3のとおりである。

本人骨は、考古学的所見より、5世紀から6世紀の古墳時代に属する人骨である。

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

成人			幼小児	合計
男性	女性	不明		
1	2	0	0	3

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考(墓番号、頭型、推定身長値)
1999-1-1人骨	男性	壮年	1999-1号墓出土人骨、155.00cm
1999-1-2人骨	女性	熟年	1999-1号墓出土人骨、147.92cm
1999-1-3人骨	女性	熟年	1999-1号墓出土人骨、過短頭型

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。年齢は、成人の場合は三主縫合の閉鎖状態で、未成年では永久歯と乳歯の歯冠や歯根の形成程度から推測した。

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分	年齢	
未成年	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
成人	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については上井ヶ呂遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1999-1-1人骨(男性、壮年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋 後頭半分を欠損している。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。

冠縫合の観察ができたが、内外両板とも分離している。

脳頭蓋の計測は、バジオン・プレグマ高は130mmで頭の高さは低い。後頭骨や頭頂骨を欠損しているため、頭型は不明である。

(2) **顔面頭蓋** 顔面頭蓋は右側頬骨を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓は強く隆起し、鼻骨もやや隆起しているため、鼻根部はやや陥凹している。上顎骨、頬骨には赤色顔料が付着している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が106mm、中顔幅は $(49 \times 2 = 98)$ mm、顔高は115mm、上顔高は63mmで、顔示数は〔117.35〕(V)、上顔示数は〔64.29〕(V)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は44mm(左)、眼窩高は31mm(右)、30mm(左)で、眼窩示数は68.18(左)となり、左側は低眼窩(chamaeconch)に属している。

鼻幅は25mm、鼻高は47mmで、鼻示数は53.19となり、低鼻(chamaerhin)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が17mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根彎曲示数は85.00となり、鼻根彎曲示数は85.00となり、鼻根部はあまり扁平ではない。鼻骨最小幅は7mmで、前頭突起向水平傾斜角は92度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。

側面角は、全側面角が80度、鼻側面角が85度、歯槽側面角は65度で、歯槽性突顎の傾向がみられる。

下顎骨は関節突起などを欠損している以外は残存状態は良好である。下顎体の高径は低く、下顎枝は幅広い。下顎角は外反している。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

● 7 ● 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 ●

8 7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 ● 5 6 7 8

〔●: 歯槽閉鎖 ○: 歯槽開存、番号は歯種〕

〔1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの1(咬耗がエナメル質のみ)～2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合で、風習的抜歯は認められない。

3. 四肢骨

(1) **上肢骨** 肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

① **鎖骨** 右側のみが残存していた。長さはやや長く、細い。

② **上腕骨** 左側骨体の一部が残存していたにすぎない。

③ **橈骨** 左側骨体の中央部が残存していた。骨体はやや大きく、骨間線はシャープである。

④ **尺骨** 尺骨も左側骨体が残存していた。骨体の径は大きく、骨間線はよく発達している。

(2) **下肢骨** 寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨および膝蓋骨が残存していた。

① **寛骨** 左側は恥骨以外の残存状態は良好であるが、右側は一部しか残存していない。径は大きく大坐骨切痕の角度は小さい。

② **大腿骨** 両側とも残存していたが、左側はほぼ完全である。長さは短い。粗線は明瞭で幅も広いが、骨体両側面の後方への発達はみられない。骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が392mm(左)、骨体中央周は85mm(左)で、長厚示数は21.91(左)となり、骨体は頑丈なものではない。骨体中央矢状径は26mm(左)、横径は28mm(左)で、骨体中央断面示数は92.86(左)となり、骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。また、骨体上横径は32mm(左)、骨体上矢状径は24mm(左)で、上骨体断面示数は75.00(左)となり、骨体上部は扁平である。

③ **脛骨** 両側の骨体が残存していたが、左側の方が保存状態は良好である。骨体の径は大きい、ヒラメ筋線の発達は悪い。左側骨体の断面形はヘリチカのIV型を呈している。

計測値は、中央最大径が32mm(左)、中央横径は23mm(左)で、中央断面示数は71.88(左)となり、骨体はやや扁平である。骨体周は86mm(左)で、骨体は太い。

④ **腓骨** 左側骨体が残存していた。骨体の径はやや大きく、稜の発達も良好で、溝も深い。

4. 推定身長値

左側の大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ

155.00cm(Pearson)、151.06cm(藤井)となり、かなりの低身長である。

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓が強く隆起し、大坐骨切痕の角度が小さいことから、男性と推定した。年齢は、冠状縫合が内外両板とも分離していることから、壮年と考えられる。

1999-1-2人骨(女性、熟年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋 後頭半分を欠損している。外耳道は両側とも観察できた。右側には骨腫は認められないが、左側には後壁に弱い隆起がみられる。冠状縫合の右側部の観察ができたが、内板は癒合しており、外板にも癒合がみられる。

(2) 顔面頭蓋 顔面頭蓋は左側頬骨弓を欠損している以外は完全である。眉上弓の隆起はやや強く、鼻骨もやや隆起しているので、鼻根部はやや陥凹している。上顎骨、頬骨、眼窩には赤色顔料が付着している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が93mm、頬骨弓幅は $[69 \times 2 = 138]$ mm、中顔幅は $[50 \times 2 = 100]$ mm、顔高は99mm、上顔高は53mmで、顔示数は $[71.74]$ (K)、 $[99.00]$ (V)、上顔示数は $[38.41]$ (K)、 $[53.00]$ (V)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は43mm(右)、43mm(左)、眼窩高は30mm(右)、30mm(左)で、眼窩示数は69.77(右)、69.77(左)となり、両側とも低眼窩(chamaekonch)に属している。

鼻幅は27mm、鼻高は42mmで、鼻示数は64.29となり、低鼻(chamaerrhin)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が21mm、鼻根横弧長は24mm、鼻根彎曲示数は87.50となり、鼻根部は扁平である。鼻骨最小幅は11mmで、前頭突起水平傾斜角は89度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は134度、鼻根陥凹示数は20.83である。鼻頬骨角は150度で、この角度は大きく、顔面扁平示数は13.86である。

側面角は、全側面角が81度、鼻側面角が86度、歯槽側面角は68度で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 /
● 7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 8

●:歯槽閉鎖 ○:歯槽閉存 /:不明、番号は歯種

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

咬耗度はBrocaの1(咬耗がエナメル質のみ)~2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合で、風習的抜歯は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨 肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

① 鎖骨 左側のみが残存していた。長さはやや長く、細い。

② 上腕骨 左側骨体が残存していた。径は小さく、骨体は扁平である。

計測値は、中央最大径が20mm(左)、中央最小径は14mm(左)で、骨体断面示数は70.00(左)となり、骨体には強い扁平性が認められる。中央周は59mm(左)で、骨体は細い。

③ 橈骨 両側の骨体遠位半が残存していた。骨体は細いが、骨間縁の発達は良好である。

④ 尺骨 尺骨も両側の骨体が残存していた。骨体の径は小さいが、骨間縁はよく発達している。

(2) 下肢骨 寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残存していた。

① 寛骨 右側腸骨が残存していた。大坐骨切痕の角度は大きい。また、耳状面前溝は深く幅が広い。

② 大腿骨 両側ともほぼ完全である。骨体の彎曲は弱い。長さはあまり長いものではなく、粗線は明瞭で幅も広いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が386mm(右)、388mm(左)、骨体中央周は76mm(右)、78mm(左)で、長厚示数は20.16(右)、20.74(左)となり、骨体はきゃしゃである。骨体中央矢状径は24mm(右)、24mm(左)、

横径は24mm(右)、25mm(左)で、骨体中央断面示数は100.00(右)、96.00(左)となり、骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。また、骨体上横径は29mm(右)、30mm(左)、骨体上矢状径は21mm(右)、22mm(左)で、上骨体断面示数は72.41(右)、73.33(左)となり、骨体上部はかなり扁平である。

③**脛骨** 両側とも内果を欠損している以外はほぼ完全である。前縁は鋭く、骨体はやや扁平で、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのIV型を呈している。

計測値は、中央最大径が30mm(右)、29mm(左)、中央横径は20mm(右)、20mm(左)で、中央断面示数は66.67(右)、68.97(左)となり、骨体は扁平である。骨体周は77mm(右)、76mm(左)、最小周は68mm(右)、68mm(左)で、骨体は女性としてはやや太い。

④**腓骨** 両側の骨体が残存していた。骨体の径はやや大きく、稜の発達は良好で、溝も深い。

4. 推定身長値

大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ147.92cm(Pearson、右)、148.31cm(Pearson、左)、147.51cm(藤井、右)、148.25cm(藤井、左)となり、低身長である。

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓が強く隆起してはいるが、大坐骨切痕の角度が大きく、耳状面前溝が深く、その幅が広いことから女性と推定した。年齢は、観察できた冠状縫合右側部の内板が癒合し、外板にも癒合が一部みられることから、熟年と考えられる。

1999-1-3人骨(女性、熟年)

1. 頭蓋

(1)**脳頭蓋** 脳頭蓋はほぼ完全である。外後頭隆起部は膨隆してはいるが、突起の発達はみられない。また乳様突起は小さい。外耳道は両側の観察ができたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合の内板をみると、冠状縫合は癒合しているが、ラムダ縫合は開離している。矢状縫合はうしろ部分は開離しているようにみえるが、これは破損の痕かもしれない。外板は、ラムダ縫合は開離しているが、冠状縫合では癒合が進行しており、矢状縫合の前半分は癒合している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が170mm、頭蓋最大幅は145mm、バジオン・ブレグマ高は123mmである。頭蓋長幅示数は85.29、頭蓋長高示数は72.35、頭蓋幅高示数は84.83となり、頭型は過短頭型(hyperbrachykran)、中頭型(orthokran)、平頭型(tapeinokran)に属している。また、頭蓋水平周は500mm、横弧長は305mm、正中矢状弧長は363mmである。

(2)**顔面頭蓋** 顔面頭蓋も完全である。眉上弓は弱く、前頭結節の発達は良好で、前頭鱗はやや膨隆している。鼻骨の隆起は弱く、鼻骨は幅広く、鼻根部は扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が87mm、頬骨弓幅は119mm、中顔幅は90mm、顔高は98mm、上顔高は54mmで、顔示数は82.35(K)、108.89(V)、上顔示数は40.34(K)、60.00(V)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は41mm(右)、40mm(左)、眼窩高は33mm(右)、32mm(左)で、眼窩示数は80.49(右)、80.00(左)となり、両側とも中眼窩(mesokonch)に属している。

鼻幅は26mm、鼻高は44mmで、鼻示数は59.09となり、過低鼻(hyperchamaerrhin)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20mm、鼻根横弧長は22mm、鼻根彎曲示数は90.91となり、鼻根部は扁平である。两眼窩幅は96mmで、眼窩間示数は20.83である。鼻骨最小幅は11mmで、前頭突起水平傾斜角は91度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は146度、鼻根陥凹示数は15.15である。

側面角は、全側面角が87度、鼻側面角が89度、歯槽側面角は80度で、歯槽性突顎の傾向は認められない。

下顎骨は左側下顎枝および右側の関節突起を欠損している。径は小さく、下顎体の高径も低いが、下顎角は外反している。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ① | ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ 〃
③ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ① | ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 2 度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。また、歯の咬合形式は不明である。風習的抜歯は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨 上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

① 上腕骨 右側骨体が残存していた。径は小さくはないが、三角筋粗面の発達は弱く、骨体は扁平である。

計測値は、中央最大径が 21mm(右)、中央最小径は 15mm(右)で、骨体断面示数は 71.43(右)となり、骨体は扁平である。骨体最小周は 53mm(右)、中央周は 60mm(右)である。

② 橈骨 右側骨体が残存していた。骨体は細い。

③ 尺骨 尺骨も右側骨体が残存していた。骨体は細いが、骨間縁は中央部で発達している。

(2) 下肢骨 大腿骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨が残存していた。

① 大腿骨 左右とも骨体が残存していた。粗線は明瞭で幅が広いが、骨体両側面の後方への伸展はみられない。骨体上部には扁平性はほとんど認められない。

計測値は、骨体中央矢状径が 24mm(右)、24mm(左)、横径は 24mm(右)、26mm(左)で、骨体中央断面示数は 100.00(右)、96.00(左)となり、骨体両側面の後方への発達は悪い。骨体中央周は 76mm(右)、77mm(左)で、骨体は細い。骨体上横径は 27mm(右)、26mm(左)、骨体上矢状径は 22mm(右)、21mm(左)で、上骨体断面示数は 81.48(右)、80.77(左)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

② 脛骨 右側は近位部を欠損している。左側は骨体が残存していた。骨体はそれほど大きいものではない。右側のヒラメ筋線は窪んでおり、ヒラメ筋の発達はよかったようである。右側骨体の断面形はヘリチカの V 型を呈しており、骨体は丸い。

計測値は、中央最大径が 25mm(右)、24mm(左)、中央横径は 18mm(右)、18mm(左)で、中央断面示数は 72.00(右)、75.00(左)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 69mm(右)、68mm(左)、最小周は 64mm(右)、63mm(左)で、骨体は細い。

③ 腓骨 右側骨体が残存していた。骨体は細い。

5. 性別・年齢

前頭結節がよく発達しており、前頭鱗もやや膨隆していることや四肢骨の径が小さいことから、性別を女性と推定した。ラムダ縫合は内外両板とも分離しているが、冠状縫合は内外両板とも癒合しており、矢状縫合も内外両板とも癒合していた可能性が強いことから、年齢は熟年と考えられる。

要約

宮崎県都城市菓子野町に存在する菓子野地下式横穴墓群で、1999 年に 1 基の地下式横穴墓が発見され、発掘調査がおこなわれた。3 体の人骨が検出されたが、人骨の保存状態は比較的良好で、菓子野地下式横穴墓に葬られた古墳人の形質的特徴を明らかにすることができた。その結果は次のとおりである。

1. 1 基(1999-1)からは成人骨 3 体である。

2. この 3 体の人骨は、5 世紀から 6 世紀の古墳時代に属する人骨である。

3. 頭蓋長幅示数を算出できたものが男女各 1 体ずつあった。男性は 77.97 で、中頭型で、女性は 85.29 で、過短頭型である。その他に観察によって頭型を推測できるものが男女各 1 体ある。男性は短頭型で傾いており、女性は短頭型である。従って、女性はおおむね短頭型と考えられるが、男性はバラツキ(多様性)がみられる。

4. 顔面は男女とも「低・広顔」である。鼻根部は、男性は陥凹しているものが多いが、女性は扁平である。
5. 男女とも歯槽性突顎がみられるものが多い。
6. 上腕骨は男女とも太く、三角筋粗面の発達も良好で、骨体は扁平である。大腕骨は男女とも短く、骨体はやや大きい。男性では粗線や骨体両側面の後方への発達が良好で、骨体上部の扁平性は弱い。女性では粗線や骨体両側面の後方への発達はよくないが、骨体上部は扁平である。胫骨は男性は大きい、女性も短く、細く、男性ではわずかに扁平な骨体もあるが、女性骨体には扁平性は認められない。
7. 推定身長は男性が155.00cm(1999-1-1)、女性は147.92cm(199-1-2)で、男女とも低身長である。

＜参考文献＞

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸, 1981a: 日守地下式墳墓出土の骨。日守地下式墳墓群発掘調査(55-14号)(宮崎県文化財調査報告書23) : 169-178, 182-183.
3. 松下孝幸, 1981b: 宮崎県上の原地下式墳墓出土の骨。上の原地下式墳墓群発掘調査(宮崎県文化財調査報告書24) : 114-129.
4. 松下孝幸・他, 1982a: 宮崎県国富町本庄28号地下式墳墓出土の骨。宮崎考古, 8: 16-20.
5. 松下孝幸・他, 1982b: 鹿児島県瀬訪野地下式墳墓3号出土の骨。瀬訪野地下式墳墓3号(大口市埋蔵文化財調査報告書2) : 11-15.
6. 松下孝幸・他, 1983a: 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡(鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24) : 236-261.
7. 松下孝幸・他, 1983b: 宮崎県高岡町旭台地下式墳墓出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 26: 78-107.
8. 松下孝幸・他, 1983c: 宮崎県都城市菓子野地下式墳墓出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡、菓子野地下式墳墓(都城市文化財調査報告書3) : 105-145.
9. 松下孝幸・他, 1983d: 山口県豊前郡北町上井ヶ浜遺跡出土の骨。上井ヶ浜遺跡第7号発掘調査概報(豊前北町埋蔵文化財調査報告書2) : 19-30.
10. 松下孝幸, 1984a: 宮崎県野尻町大萩地下式墳墓出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 第27集 : 53-111.
11. 松下孝幸, 1984b: 宮崎県江崎町出土の古墳時代人骨。宮崎考古, 第9号 : 34-48.
12. 松下孝幸, 1984c: 川内市横岡古墳群7号墳出土の古墳時代人骨。外川江遺跡・横岡古墳高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(鹿児島県埋蔵文化財調査報告書30) : 142-146.
13. 松下孝幸, 1984d: 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第18号 : 171-181.
14. 松下孝幸, 1984e: 鹿児島県大口市瀬訪野地下式墳墓5号墳出土の古墳時代人骨。瀬訪野地下式墳墓5号(鹿児島県大口市埋蔵文化財調査報告書3) : 15-28.
15. 松下孝幸・他, 1986a: 宮崎県国富町市の瀬地下式墳墓群出土の古墳時代人骨。国富町文化財資料, 第4集 : 145-185.
16. 松下孝幸, 1986b: 鹿児島県串良町岡崎古墳群1号地下式墳墓出土の古墳時代人骨。岡崎4号墳・1号地下式墳墓(串良町埋蔵文化財調査報告書(1))付録: 1-16.
17. 松下孝幸, 1987: 鹿児島県高山町崎崎古墳群出土の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第21集 : 57-70.
18. 松下孝幸, 1988: 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨。高崎町文化財調査報告書, 第1集 : 57-158.
19. 松下孝幸, 1989a: 宮崎県高崎町の古墳時代人骨。宮崎考古石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻 : 90-117.
20. 松下孝幸・他, 1989b: 宮崎県榑木原地下式墳墓出土の古墳時代人骨。榑木原地下式墳墓56-1号・江田原第1遺跡(宮崎県文化財調査報告書) : 13-30.
21. 松下孝幸, 1990a: 鹿児島県宮の上地下式墳墓出土の古墳時代人骨。宮崎考古24 : 49-67.
22. 松下孝幸, 1990b: 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究。長崎医学雑誌, 65(4) : 781-804.
23. 松下孝幸・他, 1991: 宮崎県西諸郡高野原立切地下式墳墓出土の古墳時代人骨。立切地下式墳墓群(入木地区団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)高野原文化財調査報告書第1集付録: 1-106.
24. 松下孝幸・他, 1992: 宮崎県都城市築池地下式墳墓出土の古墳時代人骨。原第2遺跡・築池地下式墳墓1991-1号・久玉遺跡・松原地区第II-2遺跡・横尾原遺跡・黒土遺跡(都城市文化財調査報告書第16集) : 79-94.
25. 松下孝幸, 1993: 宮崎県の古墳時代人骨。宮崎県史, 資料編 考古2 : 975-986.
26. 松下孝幸, 1994: 地下式墳墓の骨。考古学ジャーナル38(1994.10月号) : 26-29.
27. 松下孝幸, 2004: 宮崎県都城市築池地下式墳墓群出土の古墳時代人骨。築池遺跡(第1次～4次発掘調査)、十三束第2遺跡(第2次発掘調査)(都城市文化財調査報告書第67集) : 103-126.
28. 松下孝幸, 2006: 菓子野地下式墳墓出土の古墳時代人骨。都城市史 資料編 考古 : 590-608.
29. 内藤芳茂, 1973: 灰塚地下式墳墓人骨。灰塚遺跡(九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)) : 72-77.
30. 内藤芳茂, 1974: 人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1)(瀬戸内地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告) : 55-62.
31. 小竹彦彦・他, 1986: 宮崎県菓子野地下式墳墓出土の骨。都城市文化財調査報告書, 第4集 : 47-66.
32. 小竹彦彦・他, 1996: 16号支線道路横穴墓群出土の骨について。西都市埋蔵文化財調査報告書第22集 : 128-142.
33. 佐伯和信・他, 1991: 宮崎県えびの市広畑遺跡出土の古墳時代人骨。広畑遺跡(えびの市文化財調査報告書第7集) : 1-66.
34. 鈴木 尚, 1963: 日本人の骨。岩波書店, 東京。

表 4 脳頭蓋 (mm) (Calvaria)

		男子野		1999-1-3 女性
		1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	
1.	頭蓋最大長	-	-	170
8.	頭蓋最大幅	-	-	145
17.	パシオン・プレグマ高	130	120	123
8/1	頭蓋長幅示数	-	-	85.29
17/1	頭蓋長高示数	-	-	72.35
17/8	頭蓋幅高示数	-	-	84.83
1+8+17/3	頭蓋モズルス	-	-	146.00
5.	頭蓋成長	104	97	92
9.	超小前頭幅	91	91	92
10.	超大前頭幅	116	108	119
11.	両耳幅	126	-	115
12.	超大後頭幅	-	-	104
13.	乳突幅	-	-	92
7.	大後頭孔長	34	-	28
16.	大後頭孔幅	30	-	23
16/7	大後頭示数	88.24	-	82.14
23.	頭蓋水平距	-	-	500
24.	横弧長	-	-	305
25.	正中矢状弧長	-	-	363
26.	正中矢状前頭弧長	125	-	117
27.	正中矢状後頭弧長	-	-	136
28.	正中矢状前頭弧長	-	-	110
29.	正中矢状後頭弧長	108	-	101
30.	正中矢状前頭弧長	-	-	118
31.	正中矢状後頭弧長	-	-	91
29/26	矢状前頭示数	86.40	-	86.32
30/27	矢状後頭示数	-	-	86.76
31/28	矢状前頭示数	-	-	82.73

表 7 下顎骨 (mm・度) (Mandibula)

		男子野		1999-1-3 女性
		1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	
65	下顎前部突起幅	-	-	-
65(1)	下顎突起幅	102	95	-
66	下顎角	-	-	-
67	前下顎幅	47	48	48
68	下顎長	-	-	-
68(1)	下顎長	-	-	-
69	オトガイ高	33	26	26
69(1)	下顎体高(右)	32	29	25
	下顎体高(左)	31	29	25
69(2)	下顎体高(右)	27	27	23
	下顎体高(左)	-	-	-
70	枝高(右)	-	54	-
	枝高(左)	-	-	-
70(1)	前枝高(右)	64	58	49
	前枝高(左)	64	58	-
70(2)	最小枝高(右)	48	46	45
	最小枝高(左)	48	-	-
70(3)	下顎切歯高(右)	-	12	-
	下顎切歯高(左)	-	-	-
71(1)	下顎切歯幅(右)	-	33	-
	下顎切歯幅(左)	-	-	-
71	枝幅(右)	-	34	27
	枝幅(左)	37	-	-
71a	最小枝幅(右)	-	34	27
	最小枝幅(左)	37	-	-
79	下顎枝角(右)	-	117	-
	下顎枝角(左)	-	-	-
66/65	下顎幅示数	-	-	-
68/65	幅長示数	-	-	-
68(1)/65	幅長示数(右)	-	-	-
69(2)/69	下顎高示数(右)	81.82	103.85	88.46
	下顎高示数(左)	-	-	-
71/70	下顎枝示数(右)	-	62.96	-
	下顎枝示数(左)	77.08	-	-
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	-	73.91	60.00
	下顎枝示数(左)	-	-	-
70(3)/71(1)	下顎切歯示数(右)	-	36.36	-
	下顎切歯示数(左)	-	-	-

表 5 顔面頭蓋 (mm・度) (Facial skeleton)

		男子野		1999-1-3 女性
		1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	
40.	額長	106	93	87
41.	側顔長	73	-	62
42.	下顔長	115	104	106
43.	上顔幅	-	109	101
45.	頬骨弓幅	-	[138]	119
46.	中顔幅	[98]	[100]	90
47.	顔高	115	99	98
48.	上顔高	63	53	54
47/45	顔示数(K)	-	(71.74)	82.35
48/45	上顔示数(K)	-	[38.41]	40.34
47/46	顔示数(V)	[117.35]	[99.00]	108.89
48/46	上顔示数(V)	[64.29]	[53.00]	60.00
40+45+47/3	顔面モズルス	-	-	101.33
50.	前眼窩間幅	17	21	20
44.	両眼窩間幅	-	102	96
50/44	眼窩間示数	-	20.59	20.83
51.	眼窩幅(右)	44	43	41
	眼窩幅(左)	31	43	40
52.	眼窩高(右)	30	30	33
	眼窩高(左)	-	30	32
52/51	眼窩示数(右)	-	69.77	80.49
	眼窩示数(左)	68.18	69.77	80.00
54.	鼻高	25	27	26
55.	鼻高	47	42	44
54/55	鼻示数	53.19	64.29	59.09
55 (1)	梨状口高	-	26	26
56.	鼻骨長	-	17	21
57.	鼻骨最小幅	-	11	11
57(1)	鼻骨最大幅	-	18	-
60.	上顎前槽長	56	51	-
61.	上顎前槽幅	59	63	53
62.	口蓋高	46	42	-
63.	口蓋幅	-	40	-
64.	口蓋高	-	11	-
61/60	上顎前槽示数	105.36	123.53	-
63/62	口蓋示数	-	95.24	-
64/63	口蓋高示数	-	27.50	-
72.	全側面角	80	81	87
73.	鼻側面角	85	86	89
74.	顔側面角	65	68	80

表 6 鼻根部 (mm・度) (Nasal root)

		男子野		1999-1-3 女性
		1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	
50.	前眼窩間幅	17	21	20
50 A.	鼻根橋弧長	20	24	22
50/50A	鼻根橋示数	85.00	87.50	90.91
57.	鼻骨最小幅	7	11	11
44.	両眼窩間幅	-	102	96
50/44	眼窩間示数	-	20.59	20.83
a.	前歯突起上幅(右)	10	11	7
	前歯突起上幅(左)	10	10	7
b.	前歯突起水平結科角	92	89	91
c.	G-N投影距離	4	3	1
d.	鼻根角	-	134	146
e.	G-R距離	-	24	33
f.	垂線高	-	5	5
f / e	鼻根間凹示数	-	20.83	15.15
77.	鼻骨骨角	-	150	-
F a	f m o間距離	-	101	-
F h	垂線高	-	14	-
F h / F a	顔面扁平示数	-	13.86	-

表 8 鎖骨 (mm) (Clavicula)

	皇子野		
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	
1.	鎖骨最大長 (右)	130	-
	鎖骨最大長 (左)	-	-
2 a.	骨体彎曲高 (右)	29	-
	骨体彎曲高 (左)	-	-
2(b)	肩峰端彎曲高 (右)	28	-
	肩峰端彎曲高 (左)	-	-
4.	中央垂直徑 (右)	10	-
	中央垂直徑 (左)	-	8
5.	中央矢狀徑 (右)	12	-
	中央矢狀徑 (左)	-	10
6.	中央寬 (右)	36	-
	中央寬 (左)	-	30
6/1	長厚示數 (右)	27.69	-
	長厚示數 (左)	-	-
2 a /1	彎曲示數 (右)	22.31	-
	彎曲示數 (左)	-	-
4/5	鎖骨斷面示數 (右)	83.33	-
	鎖骨斷面示數 (左)	-	80.00
2(b)/1	肩峰端彎曲示數 (右)	21.54	-
	肩峰端彎曲示數 (左)	-	-

表 10 橈骨 (mm) (Radius)

	皇子野		
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	最大長 (右)	-	-
	最大長 (左)	-	-
1 b.	平行長 (右)	-	-
	平行長 (左)	-	-
2.	機能長 (右)	-	-
	機能長 (左)	-	-
3.	最小圍 (右)	36	39
	最小圍 (左)	36	-
4.	骨体橫徑 (右)	-	15
	骨体橫徑 (左)	-	-
4 a.	骨体中央橫徑 (右)	15	15
	骨体中央橫徑 (左)	17	15
4(b)	小頭橫徑 (右)	-	-
	小頭橫徑 (左)	-	-
4(b)	頭橫徑 (右)	-	12
	頭橫徑 (左)	-	-
5.	骨体矢狀徑 (右)	-	10
	骨体矢狀徑 (左)	-	-
5 a.	骨体中央矢狀徑 (右)	11	10
	骨体中央矢狀徑 (左)	12	11
5(b)	小頭矢狀徑 (右)	-	-
	小頭矢狀徑 (左)	-	-
5(b)	頭矢狀徑 (右)	-	13
	頭矢狀徑 (左)	-	-
5(b)	小頭圍 (右)	-	-
	小頭圍 (左)	-	40
5(b)	頭圍 (右)	-	40
	頭圍 (左)	-	-
5(b)	骨体中央圍 (右)	40	40
	骨体中央圍 (左)	47	41
5(b)	骨下端幅 (右)	-	-
	骨下端幅 (左)	26	-
3/2	長厚示數 (右)	-	-
	長厚示數 (左)	-	-
5/4	骨体斷面示數 (右)	-	66.67
	骨体斷面示數 (左)	-	-
5 a / 4 a	中央斷面示數 (右)	73.33	66.67
	中央斷面示數 (左)	70.59	73.33

表 9 上腕骨 (mm) (Humerus)

	皇子野	
	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	上腕骨最大長 (右)	-
	上腕骨最大長 (左)	-
2.	上腕骨全長 (右)	-
	上腕骨全長 (左)	-
3.	上端幅 (右)	-
	上端幅 (左)	-
3(b)	橫上徑 (右)	-
	橫上徑 (左)	-
4.	下端幅 (右)	-
	下端幅 (左)	-
5.	中央最大徑 (右)	-
	中央最大徑 (左)	20
6.	中央最小徑 (右)	-
	中央最小徑 (左)	14
7.	骨体最小圍 (右)	-
	骨体最小圍 (左)	-
7 (a).	中央圍 (右)	-
	中央圍 (左)	59
8.	頭圍 (右)	-
	頭圍 (左)	-
9.	頭最大橫徑 (右)	-
	頭最大橫徑 (左)	-
10.	頭最大矢狀徑 (右)	-
	頭最大矢狀徑 (左)	-
11.	頭車幅 (右)	-
	頭車幅 (左)	-
12.	小頭幅 (右)	-
	小頭幅 (左)	-
12 (a).	頭車幅和上小頭幅 (右)	-
	頭車幅和上小頭幅 (左)	-
13.	頭車深 (右)	-
	頭車深 (左)	-
14.	肘頭深幅 (右)	-
	肘頭深幅 (左)	-
15.	肘頭深深 (右)	-
	肘頭深深 (左)	-
6/5	骨体斷面示數 (右)	-
	骨体斷面示數 (左)	71.43
7/1	長厚示數 (右)	70.00
	長厚示數 (左)	-

表 11-1 尺骨 (mm) (Ulna) 1

	皇子野		
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	最大長 (右)	-	-
	最大長 (左)	-	-
2.	機能長 (右)	-	-
	機能長 (左)	-	-
2(b)	肘頭尺骨頭長 (右)	-	-
	肘頭尺骨頭長 (左)	-	-
3.	最小圍 (右)	-	-
	最小圍 (左)	-	-
6.	肘頭幅 (右)	-	19
	肘頭幅 (左)	-	-
6(b)	上幅 (右)	-	-
	上幅 (左)	-	-
7.	肘頭深 (右)	-	21
	肘頭深 (左)	-	-
8.	肘頭高 (右)	-	19
	肘頭高 (左)	-	-
11.	尺骨矢狀徑 (右)	-	11
	尺骨矢狀徑 (左)	13	-
12.	尺骨橫徑 (右)	-	15
	尺骨橫徑 (左)	16	-
5.	中央最小徑 (右)	-	11
	中央最小徑 (左)	13	-
L.	中央最大徑 (右)	-	14
	中央最大徑 (左)	17	-
C.	中央圍 (右)	-	42
	中央圍 (左)	50	-

表 11-2 尺骨 (mm) (Ulna) 2

	皇子野		皇子野
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
3/2	長厚示数 (右)	-	-
	長厚示数 (左)	-	-
11/12	骨体断面示数 (右)	-	73.33
	骨体断面示数 (左)	81.25	-
5/L	中央断面示数 (右)	-	73.33
	中央断面示数 (左)	76.47	-

表 13 腓骨 (mm) (Tibia)

	皇子野		皇子野
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	脛骨全长 (右)	-	-
	脛骨全长 (左)	-	-
1 a.	脛骨最大长 (右)	-	-
	脛骨最大长 (左)	-	-
1 b.	脛骨长 (右)	-	-
	脛骨长 (左)	-	-
2.	顆距間距離 (右)	-	300
	顆距間距離 (左)	-	305
3.	最大上端幅 (右)	-	-
	最大上端幅 (左)	-	-
3 a.	上内顆距面幅 (右)	-	26
	上内顆距面幅 (左)	-	-
3b.	上外顆距面幅 (右)	-	27
	上外顆距面幅 (左)	-	-
4 a.	上内顆距面深 (右)	-	-
	上内顆距面深 (左)	-	-
4 b.	上外顆距面深 (右)	-	33
	上外顆距面深 (左)	-	-
6.	最大下端幅 (右)	-	-
	最大下端幅 (左)	-	-
7.	下端矢状径 (右)	-	30 32
	下端矢状径 (左)	-	30
8.	中央最大径 (右)	-	30 25
	中央最大径 (左)	32	29 24
8 a.	荣養孔位最大径 (右)	-	33 28
	荣養孔位最大径 (左)	35	32
9.	中央横径 (右)	-	20 18
	中央横径 (左)	23	20 18
9 a.	荣養孔位横径 (右)	-	21 21
	荣養孔位横径 (左)	23	20
10.	骨体周 (右)	-	77 69
	骨体周 (左)	86	76 68
10 a.	荣養孔位周 (右)	-	89 80
	荣養孔位周 (左)	92	84
10 b.	最小周 (右)	-	68 64
	最小周 (左)	-	68 63
9/8.	中央断面示数 (右)	-	66.67 72.00
	中央断面示数 (左)	71.88	68.97 75.00
9 a / 8 a	荣養孔位断面示数 (右)	-	63.64 75.00
	荣養孔位断面示数 (左)	65.71	62.50
10 b / 1	長厚示数 (右)	-	-
	長厚示数 (左)	-	-

表 12 大腿骨 (mm) (Femur)

	皇子野		皇子野
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	股大长 (右)	-	386
	股大长 (左)	392	388
2.	自然位全长 (右)	-	377
	自然位全长 (左)	388	376
3.	股大转子长 (右)	-	-
	股大转子长 (左)	279	-
4.	自然位转子长 (右)	-	-
	自然位转子长 (左)	366	-
6.	骨体中央矢状径 (右)	-	24 24
	骨体中央矢状径 (左)	26	24 24
7.	骨体中央横径 (右)	-	24 24
	骨体中央横径 (左)	28	25 25
8.	骨体中央周 (右)	-	76 76
	骨体中央周 (左)	85	78 77
9.	骨体上横径 (右)	-	29 27
	骨体上横径 (左)	32	30 26
10.	骨体上矢状径 (右)	-	21 22
	骨体上矢状径 (左)	24	22 21
15.	颈垂直径 (右)	-	26
	颈垂直径 (左)	31	27
16.	颈矢状径 (右)	-	21
	颈矢状径 (左)	25	22
17.	颈周 (右)	-	79
	颈周 (左)	93	81
18.	颈垂直径 (右)	-	39
	颈垂直径 (左)	43	-
19.	颈横径 (右)	-	-
	颈横径 (左)	43	-
20.	颈周 (右)	-	-
	颈周 (左)	137	-
21.	上端幅 (右)	-	-
	上端幅 (左)	-	-
8/2	長厚示数 (右)	-	20.16
	長厚示数 (左)	21.91	20.74
6/7	骨体中央断面示数 (右)	-	100.00
	骨体中央断面示数 (左)	92.86	96.00 96.00
10/9	上骨体断面示数 (右)	-	72.41 81.48
	上骨体断面示数 (左)	75.00	73.33 80.77

表 14 脛骨 (mm) (Fibula)

	皇子野		皇子野
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性
1.	股大长 (右)	-	-
	股大长 (左)	-	-
2.	中央最大径 (右)	-	15 12
	中央最大径 (左)	16	15
3.	中央最小径 (右)	-	9 9
	中央最小径 (左)	10	8
4.	中央周 (右)	-	44 36
	中央周 (左)	45	41
4 a.	最小周 (右)	-	30
	最小周 (左)	-	27
4 b.	顆横径 (右)	-	8
	顆横径 (左)	-	6
4 c.	顆矢状径 (右)	-	9
	顆矢状径 (左)	-	9
4(1).	上端幅 (右)	-	-
	上端幅 (左)	-	-
4(1 a).	上端矢状幅 (右)	-	-
	上端矢状幅 (左)	-	-
4(2).	下端幅 (右)	-	-
	下端幅 (左)	-	-
4(2 a).	下端矢状幅 (右)	-	-
	下端矢状幅 (左)	-	-
3/2	中央断面示数 (右)	-	60.00 75.00
	中央断面示数 (左)	62.50	53.33
4 a / 1	長厚示数 (右)	-	-
	長厚示数 (左)	-	-

表 15 膝蓋骨 (mm) (Patella)

	皇子野	
	1999-1-1 男性	1999-1-3 女性
1. 最大高 (右)	-	-
最大高 (左)	-	34
2. 最大幅 (右)	-	-
最大幅 (左)	-	34
3. 最大厚 (右)	-	-
最大厚 (左)	19	18
4. 関節面高 (右)	-	-
関節面高 (左)	35	29
5. 内関節面幅 (右)	-	-
内関節面幅 (左)	-	19
6. 外関節面幅 (右)	-	-
外関節面幅 (左)	25	23
1/2 膝蓋骨高幅示数 (右)	-	-
膝蓋骨高幅示数 (左)	-	100.00

表 17 中央周の比

	皇子野		皇子野	
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性	1999-1-3 女性	1999-1-3 女性
横骨 / 尺骨	-	95.24	-	93.02
	94.00	-	-	-
横骨 / 上腕骨	-	69.49	-	66.67
	-	50.85	-	-
距骨 / 上腕骨	-	-	-	-
	-	75.64	-	78.95
上腕骨 / 大腸骨	-	-	-	-
	-	77.63	-	86.95
上腕骨 / 脛骨	-	-	-	-
	-	101.32	-	90.79
脛骨 / 大腸骨	101.18	97.44	88.31	-
	-	57.14	52.17	-
脛骨 / 脛骨	52.33	53.95	-	-

表 18 形態小変異 (Non-metoric crania variants)

	皇子野		皇子野		皇子野	
	1999-1-1 男性		1999-1-2 女性		1999-1-3 女性	
	右	左	右	左	右	左
1. Medial palatine canal	-	-	-	+	/	/
2. Pterygospinous foramen	-	-	-	-	-	-
3. Hypoglossal canal bridging	-	-	-	+	-	-
4. Clinoid bridging	-	-	-	-	/	/
5. Condylar canal absent	-	-	/	/	-	/
6. Tympanic dehiscence Foramen of Huschke (> 1mm)	-	-	-	-	/	-
7. Jugular foramen bridging	-	-	-	/	-	-
8. Precondylar tubercle	-	-	-	-	-	-
9. Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	-	-	-	-	-	+
10. Accessory infraorbital foramen	-	-	-	-	+	+
11. Zygo-facial foramen absent	/	-	-	-	-	-
12. Aural exostosis	-	-	+	+	-	-
13. Metopism	-	-	-	-	-	-
14. Os incae	/	-	/	-	-	-
15. Ossicle at the lambda	/	/	/	/	-	-
16. Parietal notch bone	/	-	/	/	-	-
17. Transverse zygomatic suture (> 5mm)	/	/	+	/	-	-
18. Asterionic ossicle	/	/	/	/	-	-
19. Occipitomastoid ossicle	/	/	/	/	-	+
20. Epipteric ossicle	-	-	-	-	-	-
21. Frontotemporal articulation	-	-	-	-	-	-
22. Blastertonic suture (> 10mm)	/	/	/	/	-	-
23. Mylohyoid bridging	/	/	-	-	-	/
24. Accessory mental foramen	/	+	-	-	-	-
25. Mandibular torus	/	/	-	-	-	-
26. 滑車上孔	/	/	/	/	/	/

表 16 推定身長値 (男性・cm) (Stature)

	皇子野	
	1999-1-1 男性	1999-1-2 女性
Pearsonの式	上腕骨 (右)	-
	上腕骨 (左)	-
	楯骨 (右)	-
	楯骨 (左)	-
	大腸骨 (右)	147.92
藤井の式	大腸骨 (左)	148.31
	脛骨 (右)	-
	脛骨 (左)	-
	上腕骨 (右)	-
	上腕骨 (左)	-
藤井の式	楯骨 (右)	-
	楯骨 (左)	-
	大腸骨 (右)	147.51
	大腸骨 (左)	148.25
	脛骨 (右)	-
	脛骨 (左)	-

10. 菓子野地下式横穴墓群 1999-1号墓出土人骨の親族関係

舟橋京子*

*九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

1. はじめに

宮崎県都市教育委員会が行った1999年度の菓子野地下式横穴1号墓調査において計3体の人骨が出土した。都市教育委員会から分析依頼を受け、歯冠計測値による親族関係の分析が可能との判断から、舟橋が歯冠計測および関連調査を行った。以下にその結果を示し、併せて若干の考察を行いたい。

2. 資料と方法

1999年度菓子野地下式横穴1号墓（以下菓子野1999-1号墓と表記）の調査では計3体の人骨が出土しており、これらの個体を用いて分析を行う。

年齢及び性別判定に関しては、歯牙の咬耗度に基づく年齢推定は橋原（1957）を用い、寛骨耳状面に基づく年齢推定はLovejoyら（1985）を用いる。性別判定には、Buikstra and Ubelaker（1994）の方法を用いる。年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1-6歳）、小児（6-12歳）、若年（12-20歳）、成年（20-40歳）、熟年（40-60歳）、老年（60歳-）とする。人骨の詳細に関しては、本書収録の松下孝幸・松下真実の報告を参照していただきたい。

小稿では、親族関係を復元する方法として、人骨の出土状況および年齢・性別に基づいた世代構成の復元を行い、この仮説を検証する方法として歯冠計測値に基づく血縁者の推定方法を用いる（田中・土肥1989）。歯冠計測は藤田恒太郎の方法（1949）により、歯冠計測値を用いた血縁者の推定方法に関しては土肥直美らの方法（土肥他1986）を使用する。

3. 出土状態と推定される世代構成

菓子野1999-1号墓からは、成年後半男性1体（1号人骨）、熟年女性2体（2号人骨・3号人骨）が出土しており、奥壁側から1号、2号、3号の順に埋葬されている。

1号人骨は頭位を南東にとり、下肢を伸展した状態で埋葬されている。左右膝関節間是非常に狭くなっているものの、腰椎および左右寛骨と仙骨はほぼ本来の位置関係を保っている。2号人骨も頭位を南東に取り、下肢を伸展した状態で埋葬されている。2号人骨に関しては、椎骨はほぼ関節状態を保っているものの、右股関節は外れ大腿骨は外旋し後面が上を向いた状態で出土している。3号人骨は、2号人骨の左下肢にほぼ接する形で、東から頭蓋、上肢、右下肢の順に出土している。さらに右下肢の西側少し離れた位置から左下肢が出土している。3号人骨は、それぞれの部位がまとまって出土しているものの、関節状態を保っている部位はなく解剖学的位置関係にもない。

以上の出土状況から、2号を追葬する際には、1号はほとんど軟部組織の腐朽が進んでおらず、3号人骨が追葬される際もしくは最終埋葬後の再開口の際には、2号人骨は股関節が外れる程度に骨化が進んでいたと考えられる。ただし、出土状況から3号人骨が再開口時点でかなり骨化が進んでいたと推定されることから、2号人骨の片付けを再開口時とすると、軟部組織の腐朽状態と埋葬順序に矛盾が生じるため、2号人骨の片付けは3号人骨埋葬時のものと考えられる。

以上の埋葬状況から埋葬間隔を復元すると、1号と2号人骨の間はそれほど時間幅がなく長くても5年以内、2号と3号人骨の間は5年前後と推定される。3号人骨に関しては、埋葬後10年ないしはそれ以上経過後の再開口時に遺体を乱す行為が行われたと推定される。これらの埋葬間隔及び各個体の年齢から1号人骨埋葬時点での3体の年齢を考えると、1号人骨は成年後半、2号は成年後半～熟年、3号人骨は成年後半～熟年前半となり同世代の男女3体となる。したがって、復元される世代構成モデルとしては図のとおり男女のキョウダイもしくは夫婦+キョウダイの2通りが考えられる（図1）。

なお、2号人骨に関しては前耳状溝が認められる。

4. 歯冠計測値を用いた血縁者の推定

歯冠計測値を用いた血縁者の推定の結果、1号と2号人骨は複数の組み合わせで0.5以上の値が得られている(表1・表2)。2号と3号人骨に関しても1種類の組み合わせのみであるが、0.5以上の高い値が得られている。3号と1号に関しては有効な歯種の組み合わせは得られていない。

以上の結果から、上記の2つのモデルのうちモデルAの同世代のキョウダイ仮説は検証される。モデルBに関しては、1号と2号の相関係数を見ると、イトコ間になると相関係数値が他人同士との間で有意差の得られない歯種の組み合わせ複数(上下11I2CP1P2や上下11I2CMI、上下P1M1)において高い値が得られている。したがって、イトコ婚の可能性を考慮してもB-Ⅰ、B-Ⅱともに1号と2号が夫婦のモデルは棄却される。そこで、歯冠計測値を用いた分析結果の得られていない1号と3号が夫婦の場合を検討しよう。モデルB-Ⅰで1号と3号が夫婦、2号と3号が姉妹の場合、上述の理由から1号と2・3号がイトコでありイトコ婚であった可能性は低くこの仮説は棄却される。モデルB-Ⅱで1号と3号が夫婦、1号と2号がキョウダイの場合、1号・2号間では血縁関係が推定されている。2号・3号間では血縁関係が推定されているものの、イトコの可能性を排除できる歯種の組み合わせではない。したがって、モデルB-Ⅱで1号と3号が夫婦、1号と2号がキョウダイの可能性は残される。

5. 考察

以上の分析結果から、菓子野1999-1号墓出土の3体に関しては同世代のキョウダイモデルが検証された。加えて、イトコ婚の可能性を考慮するとモデルB-Ⅱ(1号と3号が夫婦、1号と2号がキョウダイ)の可能性も残される。前者は田中の親族構造モデルの基本モデルⅠに相当する(田中1995)。後者のモデルB-Ⅱ(夫婦+キョウダイ)は田中の基本モデルⅠ-Ⅲのいずれにも当てはまらない。加えて、2号人骨に前耳状溝が認められ、既婚の女性であったことを考慮すると、キョウダイと夫婦を紐帯とした埋葬原理が混在している状況になることから、モデルB-Ⅱの成立の可能性は低いと考えられる。ただし、地域的特殊性の可能性を考慮すると本例1例を以てモデルB-Ⅱのような可能性を完全に棄却することはできない。

一方で、男性・女性および女性・女性間で血縁関係が推定されることから、双系の可能性が考えられる。筆者らは近年南九州地域の地下式横穴墓出土人骨の親族関係について検討を行っている。田中良之と筆者は2011年度発掘の菓子野地下式横穴墓2011-2号墓出土個体群でも親族関係の検討をおこなっている(田中・舟橋2014)。この際には、竪穴を共有する2基の地下式横穴から出土した4体人骨を用いて親族関係の推定を行い、基本モデルⅠとⅢの可能性が得られている。加えて、立切遺跡および旭台遺跡の分析結果からは、当該地域においては少なくとも6世紀代まで基本モデルⅠが残る結果が得られている(田中他2012)。本遺跡出土人骨で検証されたモデルAは旭台および立切遺跡から得られた結果と整合する可能性を示すものである。一方で、田中の基本モデルに当てはまらないモデルB-Ⅱ(夫婦+キョウダイ)であった場合地域的な特徴を示す可能性もある。

なお、3号人骨に関しては埋葬後10年近く経過後の再開口時に遺体を乱す行為が行われたと推定される。この最終埋葬後の遺体棄損に関しては石川健らの報告(石川他2004)や田中の論考(田中2008)をご参照いただきたい。

6. おわりに

以上のように、菓子野地下式横穴墓1999-1号墓出土人骨の親族関係の復元を行った結果、双系社会であり、田中の基本モデルⅠに相当する可能性とモデルに当てはまらない地域の特徴を示す可能性も残されるという結果が得られた。今後もこうした事例検討を進めていくことは南九州古墳時代の社会像を明らかにするうえで非常に重要であると考えられる。

謝辞

本報告を行うにあたり、報告の機会を与えていただき便宜を図っていただいた都城市築畑光博氏、人骨調査に際し様々なご配慮・ご助力いただいた土井ケ浜人類学ミュージアムの松下孝幸氏、高橋浩史氏にこの場をお借りして感謝申し上げたい。

《参考文献》

Buikstra, J.E. and Ubelaker, D.H., 1994: Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.

土肥直美・田中良之・船越公成, 1986: 歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用, 人類学雑誌, 94-2, pp147-162.

藤田恒太郎, 1949: 歯の計測基準について, 人類学雑誌, 61, pp27-32.

石川健・舟橋京子・渡辺誠・原田智也・田中良之, 2004年: 長瀬横穴墓群 築部遺跡—主要地方道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—, pp82-134, 大分県教育委員会.

九州大学医学部解剖学第二講座, 1988: 日本民族・文化の生成2 永井昌文教授追悼記念論文集, 六興出版, 東京.

Lovejoy, C. O., Meindl, R. S., Prybeck, T. R., Mensforth, R. S., 1985: Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *Am J Phys Anthropol*, 68(1), pp15-28

田中良之, 1995: 古墳時代親族構造研究, 柏書房, 東京.

田中良之, 2008.5: 断体儀礼考, 九州と東アジアの考古学, 九州大学考古学研究室 50周年記念論文集, 九州大学考古学研究室, 福岡, pp275-294.

田中良之・土肥直美, 1989年: 出土人骨から親族構造を決定する, 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか, クレバロ, 東京, pp169-185.

田中良之・舟橋京子, 2014年: 菓子野地下式横穴墓被葬者の親族関係, 郡城市文化財調査報告書第113集 郡城市内道路7, pp44-46, 郡城市教育委員会.

田中良之・舟橋京子・吉村和明, 2012年: 宮崎県内陸部地下式横穴墓被葬者の親族関係, 九州大学総合研究博物館研究報告, 10, pp127-144.

植原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究, 熊本医学会雑誌, 31, pp607-656.

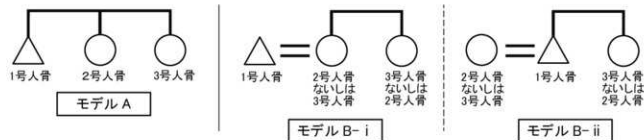
表1 歯冠計測値

歯冠項目	1号人骨		2号人骨		3号人骨	
	R	I	R	I	R	I
上顎						
I1	9.0	9.0	8.4	8.7	-	-
I2	7.4	7.5	6.8	6.6	-	-
C	8.0	8.0	7.5	7.5	-	-
P1M2	7.5	7.2	7.0	6.8	-	-
P2M2	6.8	6.8	6.5	6.6	-	-
M1M2	-	10.7	10.3	10.2	-	-
M2M2	10.5	-	9.5	9.6	-	-
P1BL	9.9	9.8	9.3	9.4	-	-
P2BL	9.7	9.7	9.5	9.5	-	-
M1BL	-	12.5	11.7	11.5	-	-
M2BL	12.0	-	11.7	11.6	-	-
下顎						
I1	5.5	5.2	5.3	5.2	-	-
I2	6.4	6.1	5.6	5.7	-	-
C	7.3	7.3	6.8	6.8	6.5	6.4
P1M2	7.1	-	7.0	7.0	5.9	6.7
P2M2	7.4	7.1	7.0	7.0	6.6	7.0
M1M2	12.0	12.2	11.1	11.3	11.1	-
M2M2	11.7	-	11.4	-	11.6	-
P1BL	8.4	-	8.0	7.9	7.2	7.2
P2BL	9.1	9.3	8.9	8.6	7.6	7.8
M1BL	11.3	11.5	10.6	10.7	10.4	-
M2BL	11.0	-	10.6	-	10.5	-

数値: an, MD 近遠心径, BD: 頬舌径

表2 相関係数値

歯種の組み合わせ	1号*2号	2号*3号
U1I2CP1P2M1 / U1I2CP1P2M1	0.737	-
U1I2CP1P2 / U1I2CP1P2	0.743	-
UCP1P2M1 / UCP1P2M1	0.833	-
UP1P2M1 / LP1P2M1	0.841	-
U1I2CM1 / U1I2CPM1	0.581	-
UP1M1 / LP1M1	0.814	-
U1I2CP1P2M1M2	0.849	-
U1I2CP1P2M1	0.826	-
UCP1P2M1	0.868	-
UP1P2M1	0.892	-
LP1P2M1M2	-	0.629



報告書抄録

ふりがな	みやこのじょうしなしいせき 10
書名	都城市内遺跡 10
副書名	
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	近沢恒典
編集機関	都城市教育委員会事務局文化財課
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1-16 郵便885-0034 電話(0986)23-9547
発行年月日	2017年3月27日

遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
枠外(都元一丁目/菖蒲地区公民館)	都城市都元一丁目1-5 ほか	31.744290	131.089028	5/17	20㎡	その他建物(公民館)
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
城跡・集落跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世	弥生土器・鉄器・中世土師器		ピット	「松原地区遺跡群」東四趾大	
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
都城跡(取添)	都城市都島町520-1	31.717955	131.047331	5/26	46㎡	住宅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
城跡・集落跡	縄文・弥生・中世・近世	青磁		堀		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高城野ノ原遺跡群	都城市高城野大井手3564	31.802301	131.144685	7/25	21.6㎡	畜舎
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
古墳・集落跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	なし		周溝?		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高城野古墳(7号)/高城野ノ原遺跡群	都城市高城野大井手3445	31.804587	131.142385	8/17-18	50㎡	太陽光発電施設
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
古墳・集落跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	土師器		周溝・地下式竈穴墓・溝状遺構	照指定史跡	
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大島島田遺跡	都城市金山町970 ほか	31.771384	131.076225	8/22-29	20㎡	公園整備(公衆トイレ)
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
城跡・生糸遺跡	古代・中世・近世	土師器		水田跡		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中床丸遺跡	都城市梅北町	31.670506	131.053511	10/26	8㎡	道路拡幅
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
集落跡・生糸遺跡	縄文・縄文・弥生・古墳・中世	なし		ピット		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
菓子野地下式竈穴墓群	都城市菓子野町9579-1	31.776120	131.045095	199.9.1-14	13.3㎡	自然発掘
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構	特記事項	
地下式竈穴墓	古墳	人骨・鉄剣・刀子・鉄鏝・土師器		地下式竈穴墓	1999-1号墓	

都城市文化財調査報告書 第132集

都城市内遺跡10

2017年3月27日

編集・発行 都城市教育委員会事務局 文化財課
宮崎県都城市菖蒲原町 19-1-16

郵便 885-0034 電話 (0986)23-9547

印刷・製本 株式会社 都城印刷

宮崎県都城市早鈴町 1618

郵便 885-0055 電話 (0986)22-4392

新
城

印

幸せ上々、みやこのじょう

日本一の酒と風情、とっておきの自然と伝統